

田辺市のひきこもり支援

(窓口開設 23 年目の報告)



令和5年4月～令和6年3月
和歌山県田辺市

・・ 目 次 ・・

I . 田辺市におけるひきこもり支援	
1. 田辺市ひきこもり支援	 1
2. 田辺市ひきこもり相談窓口 紹介ビラ	 4
II . 令和5年度 支援の実際	
1. 相談実績	 5
2. 支援の報告	
(1) 家族会(ほっこり会)	 9
(2) 青年自助会実績	
(3) 啓発活動・視察・問い合わせ	
(4) ひきこもり支援啓発 パネルディスカッション	 10
(5) 田辺市ひきこもり検討委員会 議題／活動	 32
(6) ひきこもり検討委員会 講義	 33
III . 参考資料	
1. ひきこもり家族の会 ほっこり会 紹介ビラ	 53
2. 認定NPO法人 ハートツリー 紹介ビラ	 54
3. NPO法人 かたつむりの会 紹介ビラ	 59
4. NPO法人 共生舎 紹介ビラ	 60
5. 田辺市ひきこもり検討委員会 設置要綱／委員構成	 61

I. 田辺市におけるひきこもり支援

＝アフターコロナ、ひきこもり支援について考える＝

田辺市では、平成 13 年にひきこもり相談窓口を開設するとともに、保健、医療、福祉、教育、雇用などの関係者からなる「田辺市ひきこもり検討委員会」を組織し、相互の連携を図り、協力しながら課題の解決に取り組み、23 年目を迎えました。

ひきこもり支援の取り組みを始めた当時に比べると、ひきこもり相談窓口は地域の中で身近になり、ひきこもり相談窓口「ひとのわ」以外にも南紀若者サポートステーションやひなたの森(居場所)等、相談できる機関が増え、社会資源も充実してきました。

令和元年より猛威を振るった新型コロナウイルス感染症も、令和5年5月に5類感染症に移行し、少しずつコロナ禍前の日常が戻ってきたように思います。しかしながら、令和4年の厚生労働省の調査によると、15 歳から 64 歳までの年齢層で広義のひきこもりに該当する人が 146 万人に上り、そのうち5人1人はコロナの流行が理由という、コロナ禍での社会環境の変化が背景にあることをうかがわせる結果でした。また、相談しない理由として「解決できないと思う」と答えた方が5割を超えたとの結果から、従来の解決ありきの相談だけでなく、今抱えている孤独孤立感を少しでも和らげられるような柔軟な支援も必要ではないかと感じます。

表面化していない潜在的なニーズや長期化する中高年のひきこもりである 8050 問題にも対応すべく、より相談しやすい体制を整備すると共に、人と人との「つながり」を実感できる地域づくりを考えていくことが、これからの課題であると考えます。

今後も引き続き、ひきこもり検討委員の皆様と共に、ひきこもり相談窓口「ひとのわ」の周知や気軽に相談していただけるような体制づくりに努めながら、切れ目のない支援を構築していけるように、ひきこもり検討委員会を中心としたネットワークを活かし、中学校や高等学校等の教育機関や支援機関とも連携を図り、人の輪を大切にしながら支援できるように取り組んでまいりたいと考えます。

ひきこもり支援の経過

平成 9 年 6 月	議員一般質問。
平成 13 年 1 月	田辺市ひきこもり検討委員会を設置。
平成 13 年 3 月	ひきこもり相談窓口の開設(保健師 1 名専任)。
平成 13 年 4 月	田辺市ひきこもり検討小委員会の設置。
平成 14 年 5 月	HAPPYが、ハートツリーハウス開所。 社会的ひきこもり青年の居場所活動開始(国・県より補助金)。
平成 14 年 6 月	田辺市ひきこもり家族会の設置。
平成 16 年 1 月	田辺市ひきこもり青年自助グループの育成(月2回)。
平成 16 年 3 月	ひきこもり相談窓口担当者1名増員。 2名(保健師・相談員)体制に。
平成 16 年 4 月	田辺市ひきこもり家族会が自主運営。
平成 17 年 4 月	ひきこもり青年自助会(知音CHI-IN)が開始(週 1 回)。
	ハートツリーハウスが、ひきこもり者社会参加支援センター」 運営事業補助金を受けて運営(県・市の補助金)。
平成 18 年 10 月	ハートツリーハウスがNPO法人認可 ハートツリーに名称変更。
平成 20 年 8 月	NPO法人ハートツリーが南紀若者サポートステーション開設。 (地域若者サポートステーション事業を厚生労働省より受託)
平成 21 年 4 月	ひきこもり青年自助会(知音CHI-IN)が休会。
平成 21 年 4 月	NPO法人ハートツリーが県より若者サポートステーション事業を 受託。
平成 26 年 4 月	NPO法人ハートツリーが県より若者総合相談窓口 With You 事業 を受託。 若者サポートステーション With You 南紀として継続。
平成 27 年 4 月	ひきこもり者社会参加支援センター ハートツリーが、 ひなたの森に名称変更。
平成 29 年 12 月	NPO法人ハートツリーが認定NPO法人に正式認定。
平成 31 年 4 月	認定NPO法人ハートツリー ひなたの森の 和歌山県「ひきこもり者社会参加支援センター事業」が 国の「ひきこもりサポート事業」に移行。
令和 2 年 4 月	南紀若者サポートステーションで、 サポステ・プラス 就職氷河期世代の就労支援がスタート。
令和 2 年 10 月	ひきこもり相談窓口の愛称が「ひとのわ」に決定。
令和 4 年 4 月	「ひきこもりサポート事業」が「ひきこもり支援ステーション事業」 に変更。

田辺市ひきこもり支援ネットワーク

- ◆ 官民を超えたひきこもり支援対策の構築
- ◆ 事業報告・計画への意見
- ◆ 視察・講演会等への協力
- ◆ 対応が困難な事例の相談
- ◆ 委員の学習会

ひきこもり検討委員会 (年2回)

市担当課（商工・福祉）
紀南児童相談所
田辺市教育研究所
田辺市養護教諭研究会
和歌山県教育庁
紀南教育事務所
高等学校
紀南こころの医療センター

ほっこり会（家族会）
知音 CHIRIN（自助会）
学識経験者
精神科医師
臨床心理士・公認心理師
NPO法人 かたつむりの会
NPO法人 共生舎
（一社）白浜・田辺青年会議所

ひきこもり検討小委員会 (月1回)

市担当課（保健・福祉・教育）
田辺保健所
西牟婁圏域障害児・者相談センター
にじのわ

やおき福祉会
ふたば福祉会
認定NPO法人 ハートツリー
ひなたの森
若者サポートステーション
With You 南紀
学識経験者
臨床心理士・公認心理師

※  公的機関  は民間機関

ひとのわ

ご家族・ご本人さんだけで悩んでいませんか？

不登校のまま卒業・・・

中退後自宅中心の生活をしている・・・

進学、あるいは、就職したけれど途中で社会参加をしていない、



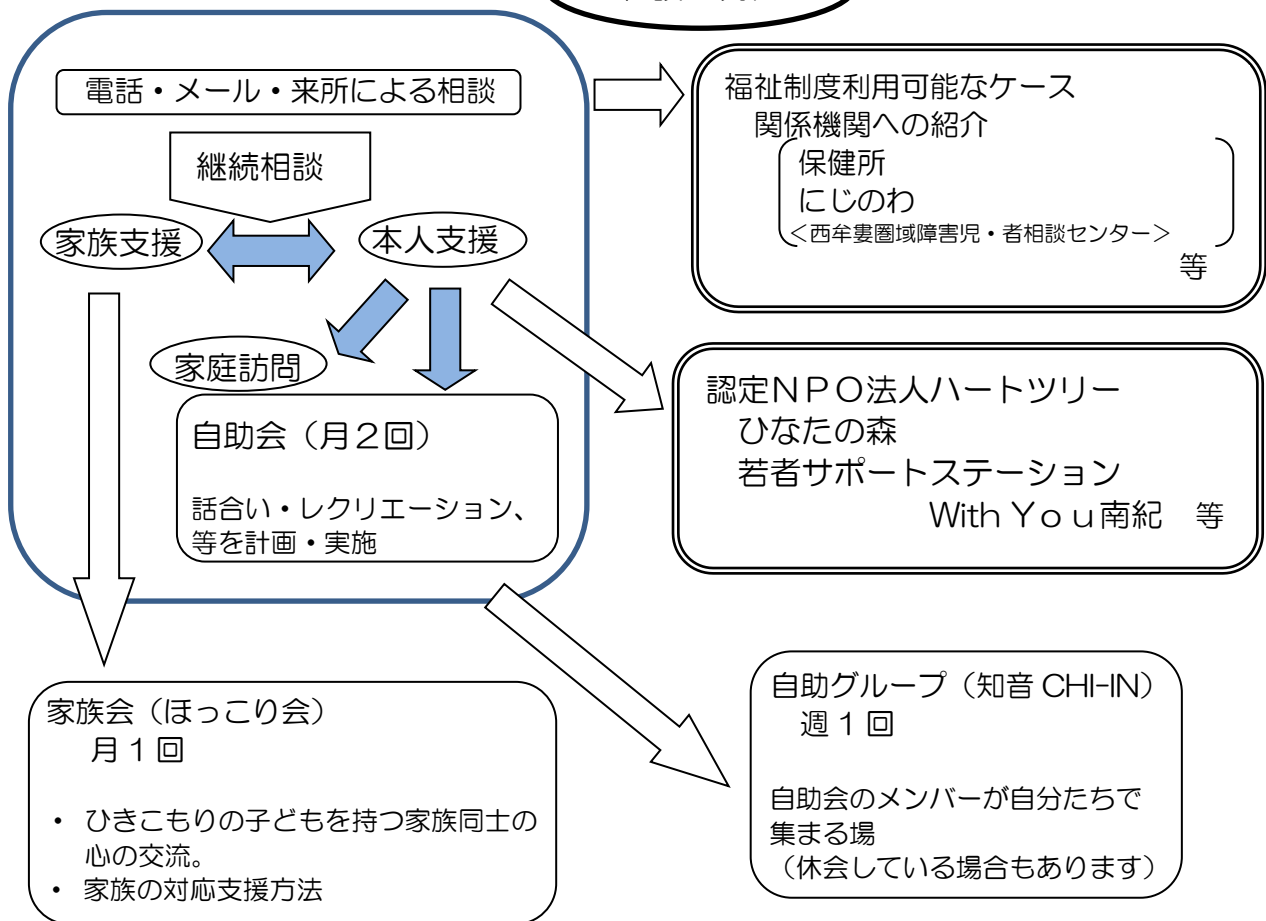
まずは、電話・メールをいただけませんか？

相談を定期的に続けていくうちに徐々に元気を取り戻していきます。

自助会、家族会（ほっこり会）があります。

会への参加は、相談窓口担当者がお会いした後紹介させていただきます。

相談の流れ



問い合わせ先

田辺市健康増進課

TEL : 0739-26-4901 (平日8:30~17:15)

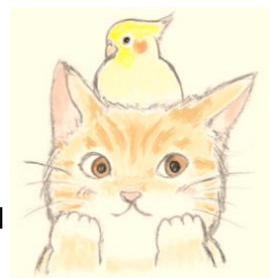
TEL : 0739-26-4933 (ひきこもり相談窓口専用)

E-Mail : shc@city.tanabe.lg.jp

Hp : <http://www.city.tanabe.lg.jp/kenkou/hikikomori/index.html>

※ 保健所にも「ひきこもり」相談窓口があります。

田辺保健所 TEL 0739-22-1200 (代表) (平日9:00~17:45)



Ⅱ－１．相談実績

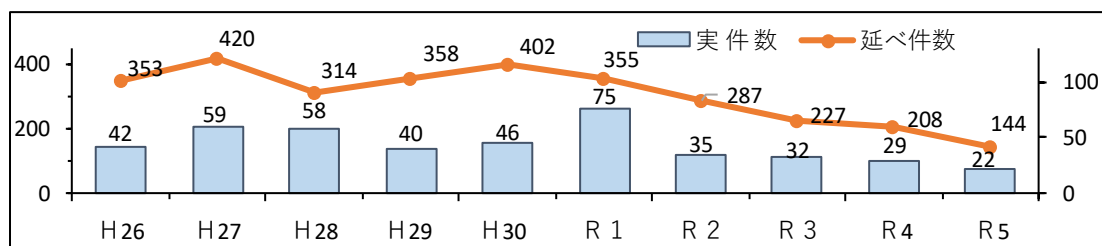
１．相談実績 令和5年度

相談窓口開設以降、令和6年3月末までに 712 家族 741 件の相談がありました。
(内、令和5年度は 7 家族 7 件)

(１) 年度別相談件数

平成 26 年度から令和5年度の 10 年間の相談実件数、延べ件数の推移を示しています。

	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
実件数	42	59	58	40	46	75	35	32	29	22
延べ件数	353	420	314	358	402	355	287	227	208	144



(２) 令和5年4月～令和6年3月までの状況

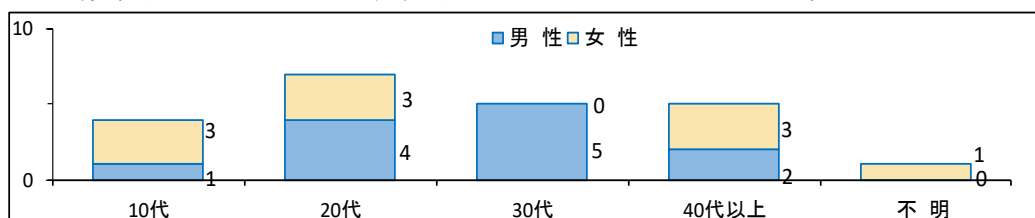
① 月別相談延べ件数

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	上半期合計		
電 話	2	0	2	1	1	1	7		
来 所	8	9	10	5	10	11	53		
メー ル	1	0	0	0	0	0	1		
訪 問	2	1	1	0	2	2	8		
合 計	13	10	13	6	13	14	69		
	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	下半期合計	総 合 計	%
電 話	0	0	0	2	1	1	4	11	7.6
来 所	10	9	11	11	5	11	57	110	76.4
メー ル	0	0	0	0	0	0	0	1	0.7
訪 問	3	3	2	3	2	1	14	22	15.3
合 計	18	12	13	16	8	19	75	144	

② 年代別男女別件数(22 件中)

	10 代	20 代	30 代	40 代以上	不明	合計	%
男性	1	4	5	2	0	12	54.5
女性	3	3	0	3	1	10	45.5
不明	0	0	0	0	0	0	0.0
合計	4	7	5	5	1	22	
%	18.2	31.8	22.7	22.7	4.5		

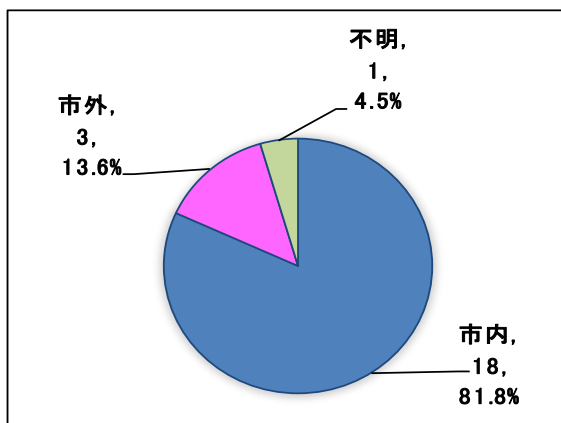
※ 端数処理のために、総計が 100 % にならない。



③ 居住別(22 件中)

	人	%
市 内	18	81.8
市 外	3	13.6
不 明	1	4.5
合 計	22	

※ 端数処理のために、総計が100%にならない。



④ 相談結果(22 件中)

	人	%
継 続	11	50.0
終 了	2	9.1
紹 介	1	4.5
その他	8	36.4
合 計	22	

終了

- ・就労(1)
- ・その他(1)

紹介

- ・若者サポートステーションWith You南紀(1)

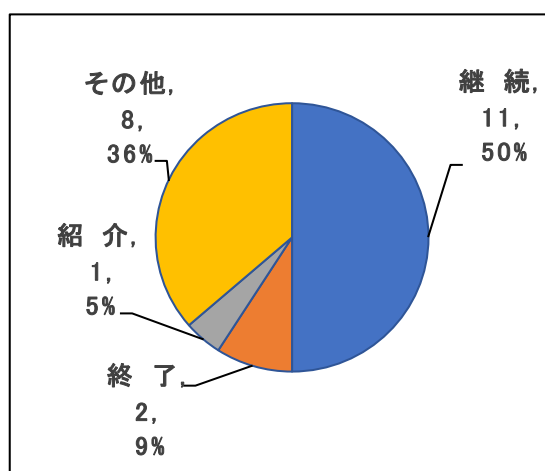
その他

3ヶ月未満の継続

- ・家族からの相談(3)
- ・関係者からの相談(1)

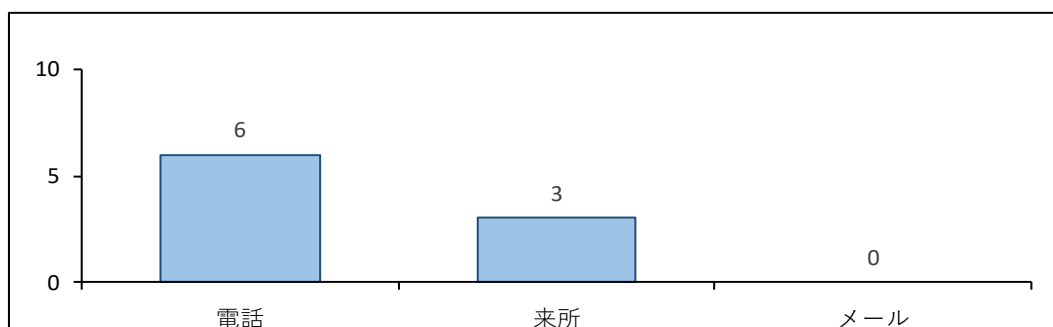
1回のみの相談

- ・本人からの相談(1)
- ・家族からの相談(3)



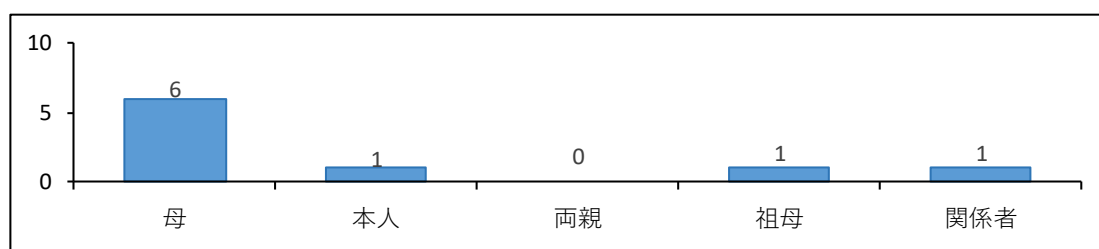
⑤ 初回相談形態(9件中)

	人	%
電話	6	66.7
来所	3	33.3
メール	0	0.0
合計	9	



⑥ 初回相談者(9件中)

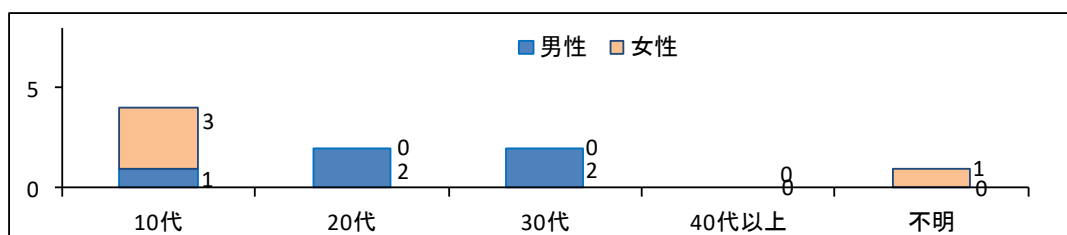
	母	本人	両親	祖母	関係者	合計
初回	6	1	0	1	1	9



⑦ 初回年代別男女別件数(9件中)

	10代	20代	30代	40代以上	不明	合 計	%
男 性	1	2	2	0	0	5	55.6
女 性	3	0	0	0	1	4	44.4
不 明	0	0	0	0	0	0	0.0
合 計	4	2	2	0	1	9	
%	44.4	22.2	22.2	0.0	11.1		

※ 端数処理のために、総計が100%にならない。



(3) 継続相談について

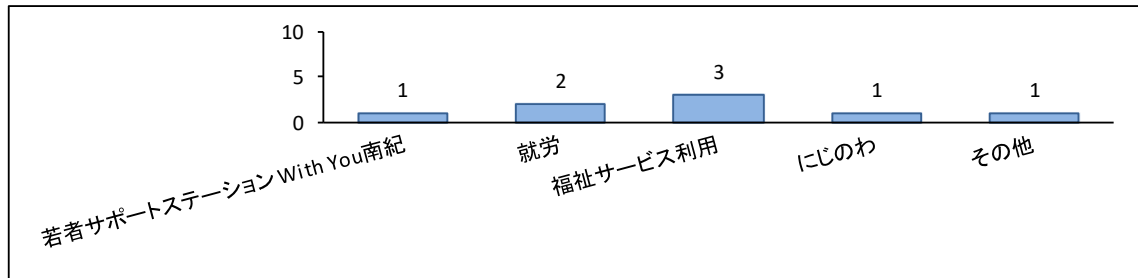
① 相談状況(重複あり)

若者サポートステーション With You南紀	1
就 労	2
福 祉 サ ー ビ ス 利 用	3
に じ の わ	1
そ の 他	1
相 談 の み (訪 問 も 含 む)	4

※ 相談のみ(訪問も含む)は、ひきこもり相談窓口の相談のみで自助会や他の支援を利用していない方。

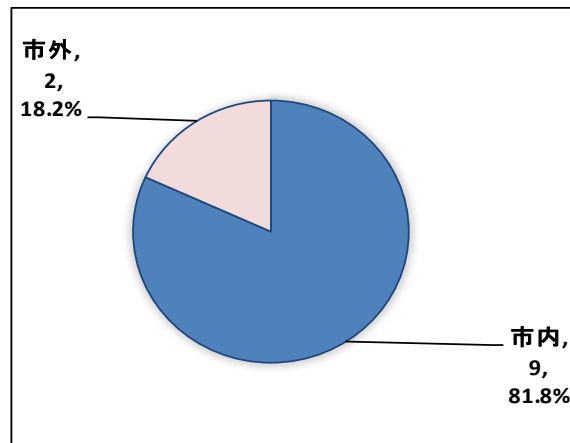
※ その他の内訳は、
ポラリス(1)

※ 医療機関を定期的に受診されている方は、6件。



② 継続居住別(11件中)

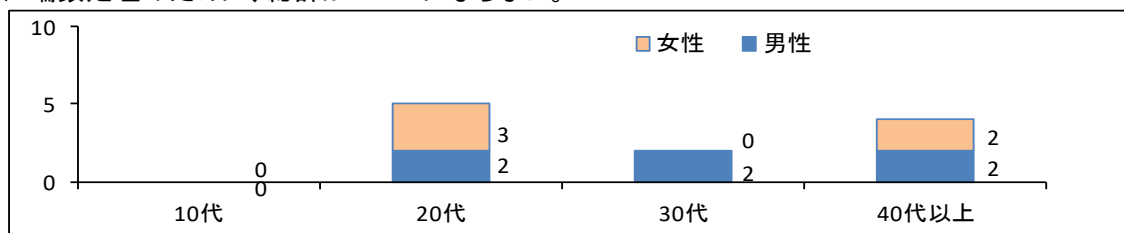
	人	%
市 内	9	81.8
市 外	2	18.2
合 計	11	



③ 継続年代別男女別件数(11件中)

	10 代	20 代	30 代	40 代以上	合 計	%
男 性	0	2	2	2	6	54.5
女 性	0	3	0	2	5	45.5
合 計	0	5	2	4	11	
%	0.0	45.5	18.2	36.4		

※ 端数処理のために、総計が100%にならない。



Ⅱ－2. 支援の報告

(1) 家族会(原則月1回)

ほっこり会(紀南地方ひきこもり家族の会)実績(平成16年4月より自主運営)

※ 参加者なし

(2) 青年自助会実績(原則月2回)

※ 参加者なし

(3) 啓発活動・視察・問い合わせ

○ 啓発活動

講演会案内チラシ配布 紀南六高校3年生、関係機関他

相談機関紹介チラシ配布 市内中学3年生、紀南六高校3年生

○ 視察

R 5 . 5 . 29	千葉県 聖徳大学 短期大学部	1名
--------------	----------------	----

(4) ひきこもり支援啓発パネルディスカッション

主 催 : 田辺市ひきこもり検討委員会/田辺市
共 催 : 若者サポートステーション With You 南紀
後 援 : 認定 NPO 法人ハートツリー/田辺市教育委員会
田辺市社会福祉協議会/田辺保健所/(公社)白浜・田辺青年会議所
紀伊民報社/(株)和歌山放送/FM TANABE
日 時 : 令和5年9月 23 日(日) 13:30~15:30(開場 13:00)
場 所 : 和歌山県立情報交流センターBig・U
演 題 : 「居場所のチカラ」
~ひきこもり支援について考える~

パネリスト : 長内 綾子 氏 NPO法人 Peer Net(ぴあねっと)
有田川町ひきこもりサポート事業
EL-BASE(える・ベース)
日下 陽太 氏 NPO法人 ヴィダ・リブレ
永井 契嗣 氏 NPO法人 エルシティオ
野中 康寛 氏 NPO法人 一麦会
麦の郷 ハートフルハウス創
南 芳樹 氏 NPO法人 ハートツリー ひなたの森
コーディネーター : 西脇 潤 氏 田辺市ひきこもり検討委員会 委員長
参 加 者 : 79 名(ひきこもり検討委員・関係者・事務局含む)



【講演内容】

コーディネーター 西脇潤(以下、西脇):はいそれでは、早速、本日のパネルディスカッションに入らせていただきたいと思います。ただいま司会の方から御紹介いただきました、5名のパネリストの皆さんですが、御手元の資料の中に各場所の様子や利用料、定員等、概要の説明と、普段の様子のことを書いている資料がありますので、それを参考にして下さい。申し遅れましたが、私、やおき福祉会で、主に精神障害をお持ちの方の支援に関わっております。よろしくお願いいたします。

それでは早速、本題のほうに入らせてもらいます。

本日のパネルディスカッションですが、居場所の力というふうなことを題材に、和歌山県内の各地で活躍されているスタッフの皆さんから、その内容、課題、将来への展望といったものをお聞かせ願えたらと思っております。

それでは、順番に各場所の、モットーや、大事にしてる理念、そういったものを、御一方ずつ述べていただきたいと思います。では、長内さんからお願いします。

EL-BASE 長内綾子(以下、長内):ありがとうございます。私たちのNPO法人PeerNetは、和歌山市と有田川町で、居場所と、和歌山市で「放課後等デイサービス」をしています。相談支援事業もあるんですけど。今回は、有田川町から委託を受けている、ひきこもりサポー

ト事業として「EL-BASE」のご紹介をさせていただきます。スクリーンの右側にあるのが、居場所の部屋になるんですけれども、この部屋が3室あります。



私たちのところのモットーとしては、もともと本体の和歌山市の方で、不登校の子たちの一次予防ということで、ひきこもる前に、不登校になる前から支援をしていこうということで関わってきた経緯があります。そういった形で子供たちや若者、20代30代の子たちが今36名ほど来ていただいているんですけれども、そういった中で、まず緩いつながりを、私たちの居場所

所としては、意識をしています。また、不登校やひきこもりになったお母さん方の相談支援というところにも力を入れていまして、やはり当事者のお母様方お父様方というところが、実際社会から孤立しやすいという現状もあるかと思います。

ですので、1番左のところが相談室になるんですけども、少し壁ブースみたいなところも設けながら、まずはお母さんたちもゆっくりお茶飲みながら、何かふらっと話に来れる。ふらっと相談を聞いてもらって、ちょっと心が楽になるというようなところを、お母さんたちの居場所としても機能するようになっていうところをイメージしています。

うちのモットーとしては、仮に不登校だとしても、引きこもり、孤立状態にさせないこと、そこを基としています。

なので、子供たち若者たちの世界観に合わせた居場所づくりっていうところを、実際に子供たちの声を聞きながら、どういった居場所だったら来たいかなとか、どういった場所だったら相談という敷居が低くなるかなっていうのを聞きながら、作っていました。実際に家族や学校とも敵対しないっていうところも大事にしています。

なので、学校とは違う空間なんだけれども、そんなところでちょっと相談が出来たりとか、学校の先生とも一緒に連携をしていったりしますので、実際こういう話をしていたよ、じゃあ学校の中で取り組めることありませんかとかっていったそういう橋渡していうところも一緒にさせていただいています。これが私たちの居場所で大事にしているところです。

最後に、うちは心理士も入れながら、ひきこもりの当事者っていうスタッフもいますので、そういった目線で、傷ついて帰ってもらわないように、来たらほっこりしたなっていうふうな居場所をつくるようなことをイメージしております。ありがとうございます。

西脇: はい、ありがとうございます。孤立させない、とても大事ですね。

では続いてヴィダ・リブレの日下さんお願いいたします。

ヴィダ・リブレ 日下陽太(以下、日下): NPO 法人ヴィダ・リブレの日下と申します。

もともと当事者で6年ほどひきこもってたんですけど、NPO 法人ヴィダ・リブレは精神科医、宮西照夫が設立しました。2、3年前ぐらいに補助金等いただきまして美浜町のほうで運営させていただいています。

うちには現在、宮西照夫精神科医1名と、2名の心理士さんが働いてくれています。相談支援等をその3名でやっていただいて、もう一人、産業カウンセラーの方が手伝ってくれてまして、その4名で相談をしています。

うちでは、20代30代の方が多くて、不登校の子は少ないかなというのはあるんですけど、やっぱり年齢が変わってくるとやることもまた変わってくるんで、うちだったら、10年困ってる子とかやったらいきなり居場所とかにくるのもしんどいよっていう子もいますんで、訪問支援等をさしてもらって、ちょっとずつ慣れてきてから、来ていただいてやってもらってます。

やっぱりみんなの中に入るのが苦手な子も多いので、少しずつ個別相談とか、そういうところから、段階を踏んで支援させていただいてます。

最近でいうと、8050 問題というのが出てくるんですけど、親御さんが亡くなられたりして、そこからどうしたらいいなっていう感じの相談も増えてきてまして、生活保護や障害年金につながる人が多いです。

若年層でもね、登校のほうも最近増えてきてるので、最近は大学生が勉強とか教えてあげたりして、支援をしています。

支援していく中で、これからどんなことが必要と感じているかというのがあるんですけど、ひきこもり支援っていうのは、やっぱり長くかかってしまうんですよ。

社会に出ていないので、どうしても、すぐに適応出来ないということが多く、長い目で見ていただきたいのと、やっぱり、出ていくっていう勇気持てない子も多いので、まずはそういういろんな場所があるんだよっていうのを知ってもらって、あとは関係機関と連携してやっていくっていう感じですね。

ヴィダ・リブレが考える居場所とは

好きなことを話しても話さなくてもよい場所

遊んでも遊ばなくてもよい場所

自分の得意・不得意を再確認出来て上手く活かせる場所

悩みを打ち明けても一緒になって悩んでくれる場所

社会や人間が怖くなくても退避出来る場所

家族仲が悪く家に居づらい方の安心できる場所

様々な体験ができ、知らなかったことや制度を知れる場所

当事者さんが動いてみたいと思えた時にお手伝いさせて頂く場所

そんな場所が居場所です

西脇：ありがとうございました。スローステップと医療との連携、また当事者の方がスタッフされてるって、余り聞かないところなんで、また一つの特徴かなと思います。

それでは続いてエルシティオの永井さんお願いいたします。

エルシティオ 永井契嗣(以下、永井)：エルシティオの永井です。エルシティオが何やってるかっていうと、ひきこもりの支援です。ひきこもりの防止とか余り考えてないです。「引きこもることを支援したいなと思ってやっています」みたいな言い方ってどうなんでしょう。

大事にしてることって聞かれて、「ぬるま湯」って書いてるんですけど、これ、今、来ている人たちとか、相談してくれる人たちに、ここは「ぬるま湯」ですよっていう説明はしません。多分そうじゃないんだけど、何かこう、斜に構えて、性格ひねくれてるんで、斜に構えて、世の中に、何やってるのって聞かれたら「ぬるま湯です」みたいな言い方をします。

それは何か、最近思ってることがあって、ずっとかな、なかなか僕らが何やってるかみたいなことって、全然伝わりにくくなって思うことが多々あって、何か引っかかる言い方をしたいなと思って、思いついた感じです。ぬるま湯って、カチカチに固まってるからそれを緩めてあげると、何か勝手に元気になっていくみたいなイメージ。

そうじゃない人もいてるんやけど、一定そういう人たちがいてる。だから環境さえというか、安心安全みたいなことが保障されれば、それで元気になってくるかなみたいな感じ。居場所っていうのはそういうことをする場所なのかなっていうことで「ぬるま湯」っていう説明をしています。

そして、エルシティオが具体的に何やってるかっていうところの活

動スケジュールは特になし。今は 5 名ぐらいコンスタントに来ていて、好きな事として時間過ごすみたいな感じです。



あと、エルシティオとしては20年超えたぐらいやってて、設立の経緯のところは、南さんが書いてくれたやつのハートツリーをエルシティオに変えただけです。本当に同じ時期に同じ状況の中、立ち上げて和歌山市と田辺市でやっています。

僕自身は、立ち上げて5年ぐらいはこの支援やってたんですけど、その後障害者支援にいつて、ちょうど1年前に一緒に立ち上げた理事長、金城先生亡くなったんで、ひきこもり支援に戻ってきました。歴史はあるけど、僕の経験はやり直して1年目みたいな感じの感覚です。

西脇:ありがとうございます。正解を押しつけない支援というのは、ひきこもり支援や他の支援でも大事だなと思います。

そういった中で、永井さん独特の言い回しで「ぬるま湯」って言いましたけれども、やっぱりどっかで「これが普通」っていうのを押しつけられて苦しんで、行き詰まってるっていうふうなものがあるかなと思いました。

では続いて、ハートフルハウス創の野中さんお願いします。

ハートフルハウス創 野中康寛(以下、野中): はい、野中ですよろしくお願いします。映像を用意しているので、それを見ていただけたらと思うのですが、うちのひきこもり支援は、ひきこもりステーション事業と、就労継続支援 B 型事業の創カフェっていうのを二つ併設してやっています。

B 型事業でね、カフェなんかをやっていると、そこで訓練をしたりだとか、人慣れして、社会につながっていくんですか、出ていくんですかみたいなことをよく言われるんですけど、それは結果、そういうふうな人もいてるっていうだけです。

最初ね、居場所だけやってたんです。ちなみに始めたのは96年、登校支援96年からで、長くやっています。で、居場所の中で、メンバーたちと、そこで何するって話しをしてたんです。映画見に行こうかって話になって、それで来週映画見に行こうってなって、当日になったら1人も来ないんです。原因は何よって話を聞いたら、自分たちは息をしているだけでも社会にも家族にも迷惑をかけてると、そんな自分が、家族に「創」で遊びに行くから、「お金をくれ」とお小遣いちょうだいとね、口が裂けてもよう言わないっていうふうなことがメンバーから出たので、それやったらその生活費稼ぐっていうんじゃないかって、自分たちがやりたいことや食べたいものを食べたり、行きたいところに行けたり、っていう風な自分たちのそういう活動費を稼ぎ出そうというので、広がってきてできたのがきっかけです。

居場所のところでいうと、居場所って何だろうかっていうことを、来ているメンバーとし話し合ったときに、居場所の「居」の字をね、当て字でいろいろ考えてみようっていうことを話し合って、自分たちが目指す居場所っていうのはこういう、ここに書かれてるよ

うな場所なんやなというところで、生きる場所と活動の「活」の生きる、生きる場所と生きる場所を重ねる場所が居場所なんやというふうなことを、私は思っております。以上です。

西脇:ありがとうございます。まさしく可能性を、感じる居場所かと思います。はいそれでは、最後になりました、ハートツリーの南さんお願いいたします。

ひなたの森 南芳樹(以下、南): ハーツツリーひなたの森の南と申します。どうぞよろしくお

ハートフルハウス創が想う『居場所』って

居場所とは、安心できゆっくりできる場だけの機能ではなく、

居場所→	居心地がいい場所	意場所→	意味のある場所
射場所→	的を射る(目的を得る)	隠場所→	隠れられる、逃げられる
要場所→	必要とされる	結場所→	結びあう、共同、協同、協働
移場所→	いろいろな場所に移ることができる	囲場所→	みんなで囲む、集う
飯場所→	食事を共にする	挑場所→	挑戦する場所。挑む
良場所→	良い場所	印場所→	存在を印す

生場所(生きる場所) と 活場所(活動の場所)

それが『居場所』

願います。私、ひきこもりの検討委員をさせていただく中で、この田辺西牟婁地域の市町村からの委託を受けて、ひきこもりの居場所を田辺市でやっています。

ひなたの森

不登校相談（教育相談）がハートツリーの原点。
学齢期を超えた若者の「居場所」を作りたい！！から

官民一体となり居場所づくりを始め、全国で初めての
「ひきこもり者社会参加支援センター」（和歌山県事業）を開設。

現在は、西牟婁地域の各市町村から
「ひきこもり支援ステーション事業」を受託運営。

居場所のモットーは、
「いつ来てもいいし、いつ帰ってもいい。
何をしてもいいし、何もしなくてもいい。」

自分らしく、「そのままでもいい居場所」。
「そのままで居れる居場所」を目指しています。

もともと歴史としてはここにおけるエルシティオ永井さん、ハートフルハウスの野中さん、そして、うちのハートツリーハウスっていうのが、20 数年前に、ひきこもりの居場所をつくっていきこうということで、和歌山県といろいろ交渉する中で、全国で初めて公的なひきこもりの居場所をつくったという歴史を持っております。もともと私もは、不登校の教育相談っていうの

が原点で、学齢期を過ぎた若者の居場所を作りたい、それが全ての始まりだったかなというふうに考えております。

居場所で非常に大事にしてる部分としては、いつ来てもいいし、いつ帰ってもいい、何をしてもいいし何もしなくてもいいよっていうことで、先ほど長内さんや、野中さんも言うてくれましたし、永井さんも言うてくれました。やはり、ゆるい関係、ぬるま湯、どこにでもいられる場所っていうような形で、自分らしくそのままでもいい場所、そのままでいれる居場所っていうのを目指しているところです。

僕個人として好きな言葉、「いい加減は良い加減」やでっていうふうな言葉をよく言います。人から見るといい加減に見えるかもしれないけども、その人にとってはとっても居心地のいい、良い加減の場所っていうのをどんなふうにつくっていくかっていうことを日々、皆さんと一緒に考えながらやっていけたらなと思っています。

また中身のところとか、この後お話をさせてもらうんですが、我々が大事にしている部分として、止り木であり、居場所というのは通過していく場所というふうに考えておりますので、どんどんそんなふうに、前に前に進んでいけるようなそんな場所を目指しながら活動しています。以上です。

西脇：はい、ありがとうございました。やっぱり県下5カ所もあると、それぞれ大事にしているコンセプトとか在り方も多様だなと思いながら聞かせていただきました。

ここでちょっと私のほうから、活動している地域の紹介をさせていただきます。まず、EL-BASE は、有田地域、有田川町のほうに拠点を持っておられます。

そして、ヴィダ・リブレは、美浜町、主に日高御坊圏域のほうで取組みをされています。

そしてエルシティオは和歌山市を拠点として活動をしています。

先ほど VTR になりましたけれども、ハートフルハウスの方は紀の川市、紀の川水域と言っているんですね。

野中：岩出ですね。

西脇：岩出ですね。そして言わずもがな、ひなたの森は、田辺西牟婁圏域というふうになっております。

ということで、本当に県下全域を網羅するような形で、ゲストの方に来ていただいておりますので、この後も、また、その具体的な内容について、質問を続けていきたいと思っております。

先ほどはですね、各居場所における大事にしているモットーは何かっていうふうなことについて、お答えいただいたんですけども、次は一日のスケジュールや行事っていうふうなものをベースに、こういう取組みをしていますということを、それぞれ紹介していただきたいと

思っております。では、最初に EL-BASE からお願いいたします。

長内: はい、EL-BASE なんですけど、実は毎日開所しておりませんで、原則土曜日、月 3 回、から 4 回ぐらいということで、開所をしています。

活動時間は 11 時から大体 5 時になるんですけども、その中で、御本人さんの個別の相談、あと保護者の相談があって、集団の居場所がお昼からあるんですけどもそこに入る一歩前の段階として、個別でまずスタッフや場所に慣れてもらって、少しやりとりと関係を築いてから、集団に入ってもらいたいという思いもあるので、個別の居場所の枠も設けています。集団の居場所が終わってからは、同じように個別相談をしたり、個別の居場所をして閉所という形になっています。

集団の居場所は、どちらかというと元当事者のスタッフが入ってもらって、一緒に遊んだりとか、おしゃべりしたりとか、お茶飲みたい人はお茶飲んでも良いよっていうふうな、ゆるった空間を作っています。以上です。

西脇: はい、ありがとうございました。それでは続きまして、日下さんお願いいたします。

ヴィダ・リブレ	
開 所 日	火～土曜日 9:00～17:00 (居場所は13:00～)
活動スケジュール	
時 間	活 動 内 容
	2023/8/26 (土) の一日
13:00～	居場所開所
14:00～	パドレスの集い (親の会) 臨床心理士2名と親御さんが集まり話し合う
15:00～	ボードゲーム交流会 様々なボードゲームで一緒に遊んで交流
～17:00	居場所開所 (掃除・片付け)
【備考～不定期に行う活動等～】	
・講演会・研修会の実行・運営 ・SST (ソーシャルスキルトレーニング) ・スポーツ体験イベント (卓球・テニス等) ・クリスマス・88Q・ハロウィン等の季節型大型イベントの開催 (交流会) ・他の居場所事業者様とのコラボイベント	
・パドレスの集い (親の会) ・料理作り体験等のイベント ・登山イベント	

EL-BASE(える・ベース)

開 所 日 原則土曜日 (月3回以上)

活動スケジュール

時 間	活 動 内 容
11:00～	個別相談・個別居場所 (1枠30分)
14:00～	集団居場所
15:30～	個別相談・個別居場所
17:00～	閉所

【備考～不定期に行う活動等～】
イベント (ゆるっとお絵描き部、クリスマス会など)

日下: NPO 法人ヴィダ・リブレでは火曜日から土曜日まで、13 時から 17 時の間、居場所を開いてます。ここに書いてる活動スケジュールなんですけど、土曜日は結構イベントとか入れているんですが、親の会も月 1 回、開いてます。心理士と親御さんが 1 時間ほど話していただいています。この日はボードゲームの交流会をしたんですけど、ほかの日であれば、ソーシャルスキルトレーニングという形で、困ったことを話してどうやって解決していこうという話をしたりもします。その

あと 17 時で閉所して、その後は掃除や片づけをします。

土曜日はイベントばかりなんですけど、来てくれた人から、またそういう「やりたい」とかが出てきたら、サポートに入るっていうかたちをとってるんで、逆に言うと土曜日だけ自由が利かないという感じになります。いろいろイベントをやってますんで、このイベントだったら行ける、このイベントやったらあかんという子もおるんで、自分の好きなやつ、やってみたいっていうこととかいろいろ提案してくれたら、そういうのを取り入れたりしてやっています。以上です。

西脇: はいありがとうございました。それでは続きまして、永井さんよろしくをお願いいたします。

永井: はい。活動スケジュール、特になし。

西脇:とある一日など、教えてもらえたら。

永井:朝から、9時から5時まで開けて、ぼろぼろやってきて、ぼろぼろ帰っていくっていう感じです。うちだけを利用して人って少なく、打合せしたんかどうかわかんけど、火曜日と金曜日は誰も来ません。ほかの作業所に行ったりとか、そんながあるので、来る人が少ないから、この日だったら行ってみようかな、みたいなことになってるのかなあって思ってます。

あと、コーヒーをやってたんです。居場所を立ち上げてから、野中さんと、宮西先生のところ行って相談したら、グアテマラって話を聞いたんです。グアテマラってその当時何も知らなくて、思いつくのはコーヒーくらい。作業所として立ち上げたんで、何か作業あったらいいよね。さっき言ったみたいに、ちょっとお金稼ぐっていうこともあるし、居場所ですよ、集まってくださいって言うても、なかなか、何もなくてええ大人が集まりにくいっていうのもあるから。何かやってることあったほうがいいのかなっていうことで、作業を探してたけど、下請の作業みたいなことっていうのも何かちょっと違うやろうし、って探してる中でコーヒーって面白くない、っていうのでやっていました。

しばらくはメンバーさんにちょっと負担になってたところもあってやめてたんですけど、スタッフ中心になってやっていこうっていうのが復活してきて、経験ある人たちなので、手伝ってくれたりとかして、イベントも復活してきてそこへ出展のお誘いをいただいたりとかでやっています。

あと、家族会をやっています。PSW(精神保健福祉士)の人に旗振ってもらって、エンパワーメントグループっていう手法を使って、何かやってみたいんです。家族教室って言うて「ひきこもり」っていう事に関するトピックを講義みたいなのをちょこっとやった後に、エンパワーメントグループでというのを月1回やって、結構続けての参加者の人が多いです。親御さん対象です。

あと、音楽レッスンってあるんですが、職員で本気でやっている人がいて「音楽できるんで教えられるよ」っていうんで、教えてほしい人と言ったら、相談を受けてる人2人かな。週1回くらい、二階から「あ～あ～あ～あ～」って聞こえてきて。そんな感じです。

西脇:はい、ありがとうございました。そういう自由な感じ、大好きです。はい続きまして、野中さんお願いいたします。

野中:はい。創はですね、火曜日から土曜日の開所で、基本的に9時から5時までで、カフェはですね、木金土の営業になっていて、カフェで働くメンバーと居場所でゆっくり過ごすメンバーと二つあります。カフェも自由な働き方なので、例えば今日は昼まで働こうかなと思ったら1時ぐらいまで働いて、その後は居場所とか、今日はちょっと頑張っていけるかなと思ったら、9時から3時ぐらいまでは働いてっていう風な、いろんな働き方がゆるされるカフェなんで、カフェで働いて、居場所で居るっていうそんなかたちです。

カフェをやっていない火曜日・水曜日は何をやっているかというと、例えば火曜日だったら、朝は相談に入ることが多いです。相談に入る前の時間は大体ケース会議をやっています。

エルシティオ	
開 所 日	月～金曜日 9:00～17:00
活動スケジュール	
時 間	活 動 内 容
9:00～17:00	特になし
	
【備考～不定期に行う活動等～】 ・ イベント参加・出店 ・ 音楽レッスン ・ 他団体と交流イベント（運動会）	

常勤職員 3 人で、ちなみに今年度から 350 万円、紀の川市・岩出市から増額をしていただいて、どうしてももう 1 人職員要るんやということで、増額してもらって、3 人体制を置くことが出来たので、さらにね、もっともっと職員いる方がいいんですけど、去年よりは、充実した体制がとれるかなと思います。

昼からは「しゃべくろ会」っていう、いろんなお話をする会をね、テーマを決めて話をするんですけど、例えば、さっきのね「居場所」の「居」の字ありましたけど、あれもしゃべくろ会で話をした内容なんですけど、「居場所ってなんやろか」とか「自立と依存について考えてみようか」とか「支え合うってどういうことなんかな」とか「頼るってどういうことやろか」とか、しょうもないテーマで話し合うこともあります。「宇宙人いてるんか」とか「100 万円当たったらどうするか」とかそういう風などうでもいい話もしながら、テーマを決めてお話をするっていうことをやっています。

そんな感じの 1 日の流れで、あとは、メンバー同士で自分たちのやりたいことをいろいろ出しながら、それを実現していくっていうふうなことをして、例えば面白いのが「焼肉部」っていうのがあって、定期的に焼肉食べ放題に行こうっていう会で、その中心メンバーは、いわゆる幹事をやってくれていて、みんなからお金を集めて、場所をおさえてみたいなのをしてくれる部長がおったりだとか、「ゆるキャン」というアニメが流行った時にはキャンプに行きたいって言い出すので、キャンプ部部長を作ってみんなでキャンプに行ったりだとか、筋トレしようとか、自分たちのやりたいことを実現させていくっていうふうなことを、居場所の中で行っております。

西脇: ありがとうございます。最後に南さん、お願いいたします。

南: はい。ひなたの森も居場所の開所時間は午後からになっております。午前中というのは、スタッフの事務仕事であったり、新規の相談の方の見学や対応というところになるべく時間をあてさせていただいています。

先ほどの説明でもありましたようにうちは、何してもいいし、何もせんでもいいよっていうのをうたってるんですけども、何してもいいよ、好きにやって言うてもなかなかそれが、自分で行動に移せないという方もたくさんおられますので、やっぱり、何かこうやること聞いてみようかというような形で、月に 1 回ミーティングっていうもので、皆さんがそれぞれやってみたいことを意見出し合ったりしてくれています。

基本的に主なイベントとしては昼食会をやろうか、昼食のメニュー何にしようかちゅう話だったり、体育館借りてスポーツしましょうとか、1 回行って見たかった店で外食会しようとかっていうそんなことなんかもさしてもらっています。

それぞれ予定は決めるんですけども、それを参加するしないっていうのは個人の自由で、昼食会は皆行くけど、僕は居場所に残りますっていう方なんかもおられたりします。

ハートフルハウス創		
開 所 日	火～土曜日 9:00～17:00 (居場所は13:00～のことが多い)	
活動スケジュール		
時 間	活 動 内 容	
2023/8/22(火) の一日		
10:30～	① 個別支援 (面談: スタッフ2名対応) ② 相談メールチェック・返信、事務作業、通信づくり (スタッフ1名対応)	
12:00～	昼食	
13:00～	居場所開所	
13:30～	しゃべくろ会 (しゃべくろ会に参加しないメンバーは居場所 でゆっくり過ごす) しゃべくろ会終了	
15:30～	① 居場所活動 (スタッフ1名対応) ② 個別支援 (訪問: スタッフ2名対応)	
17:00～	終了	
【備考～不定期に行う活動等～】		
月1回: レクリエーション / 女子会 / しゃべくろ会 不定期: サークル活動 (ボードゲーム遊戯会、釣り部、・筋トレ部、 演劇部、漫遊部、キャンプ部等)		

ひなたの森		
開 所 日	月～金曜日 9:00～18:00 (居場所は13:00～)	
活動スケジュール		
時 間	活 動 内 容	
10:00～	新規相談者の対応・見学	
13:00～	居場所の開所 ※各々自分の好きな時間に来所。	
14:00～	ミーティング (月一回) 来月の予定やチャレンジしたいことなど、意見を出し合い決める ※主なイベント例として、昼食会、スポーツ、外食会、お茶会などなど	
15:00～	ゲーム、ボードゲーム、読書、雑談など 各々が好きなことをして過ごす時間	
～17:00	居場所開所	
		
【備考～不定期に行う活動等～】		
・地域におけるイベントごとの参加 (フリーマーケットや祭り) ・施設利用者サポートセッションとの協働による体験イベントや職場体験など ・活動協力してくれる農園さまから産物の収穫体験 ・他団体との交流イベント (例) BBQや運動会		

ゲームやボードゲーム、読書や雑談なんかを居場所でやっています。
今、特にひなたの森では非常に麻雀がブームになってましてですね、4 人集まったら必ずじやらじやらと、昨日なんかは 8 人おったので、2 台用意してやっていました。

でも、安心してください、健全な麻雀ですですからかけておりません。プライドだけです。プライドと職員としての負けない心でやっています。

あとですね、ちょっと最近になってですねこれだけ県下でいろんなひきこもり支援をやられてる団体さんというのがたくさん出てきたというところもあって、ぜひ、交流をしようということで、7 月にはヴィダ・リブレさんと、焼肉のバーベキューをやらしてもらいました。

この冬、11 月の後半にはですね、何と県下のいろんな団体が集まって運動会をしようということで、この田辺で今運動会をしようと企画を進めているところです。

そんな形で、自分らの団体だけではなくていろんな人とのかかわりを持てるようなことなんかも居場所で工夫していけたらなというふうに思いながら活動しているところです。以上です。

西脇: はい、ありがとうございます。

5 か所もあるんで、時間制限こちらからお願いしてあるんで、もういっぱい話して下さっているんですが、もしかしたらこう情報量的にね、もっと詳しく聞きたいのにといいところもあると思うんですけど、それは質問のカードに書いていただけたらと思います。

この後、ちょっと休憩を挟みまして、後半はこういうふうな成功事例があります、こういうことが課題として困ってますっていうふうなことなんかも話していければなと思っております。そしたら、この場で 5 分間ちょっと休憩をとっていただければと思います。

西脇: そろそろ、後半に入っていきたいと思います。後半はですね、事例を二つ御紹介いただけることになっております。

例えば、今回のテーマですね、居場所の可能性っていうふうになっていますので、全てが全てうまく行くわけではないんですけども、こういった取組があって、こういうふうな効果があったよっていうふうなことなどを、皆さんと共有出来たらと思います。それでは、まず、最初の事例をヴィダ・リブレさんからお願いいたします。

日下: はい。ヴィダ・リブレの事例です。「ピアサポーターの可能性」って言って、うちではメンタルサポーターという名前でやらせてもらってます。

うちが先ほどちょっと説明させてもらったんですけど、宮西医師がね、長年、和歌山大学と紀の川病院のひきこもり専門外来でひきこもり支援を行ってきた中で、メンタルサポーターっていう、引きこもっていた若者をサポーター、ピアサポーターとして雇い、先輩として、現ひきこもり者、当事者さんの支援に当たってもらう仕組みという形です。

趣味や好きなことから話してもらうことにより、理解した者がいるとね、当事者さんも話しやすいということで、いきなり先生と話すの嫌やろうというふうに思ったので、そういうところから仲良くなって話していくっていうのもあります。やっぱり同じ経験したものの者同士で話すことによって、気軽に行きやすいよっていう環境づくりっていうのがあってます。

メンタルサポーターと言っても、能力のところがものすごい違って、この子はこれがうまいけど、ものすごいこれが苦手っていうのもあるんで、やっぱりそれで得意なことでまず参加してもらうというところもありまして、そういうところで、ちょっとずつ、その子にも慣れてもらうというか、苦手な環境とかもあると思うんですけどそういうにもちょっとずつ慣れてもらって、支援する仕事っていうのをやってもらってます。

メンタルサポーターは、元ひきこもり者の社会訓練みたいなところでもあるのかなと思うんで、やっぱりね、いろんな経験を積んでもらって、成長してもらって、自信を持って、居場所から巣立ってもらうというか。ずっとここでやってもらって、どうしてもお金がね、そんな給料というのを払えないんで、巣立ってもらってねそれでね頑張って仕事をしてもらったりと

か、そういうのがええんかなっていう、社会貢献の一つなのかもしれませんということです。

で、うちの事例でいうと、よく講演会とかで喋ってくれる人のあれなんですけど、メンタルサポーターとして働く A 君の実体験を例としてお話しさせていただきます。

彼はね、教育大学を出て英語の教育免許を取れる段階まで来たんですけど、ちょっとそのときに鬱になってしまって、うつと ASD でひきこもってしまいます。

教育免許をとらずに実家に戻ってきて、引きこもってしまいました。それでも年金の催促状が届き、父親等の家族中が特に悪く、母親にも相談出来ずに、どうするか悩んでました。通っていた心療内科で、ヴィダ・リブレを紹介してもらって、インターネットで自分で調べて、連絡をくれました。

当時ね、僕も3か月か4か月頃の時に、電話いただいて初めて、対応させてもらったんでよく覚えてるんですけど、そっから来てもらって数か月ぐらい、定期的に、1週間3、4日ぐらい、自転車で、結構な距離40分ぐらいですね。40分ぐらいかかるところをね、自転車で頑張ってきてくれて、雑談とか、ボードゲームとか一緒にゆったりして話とかやってて、途中で国民年金の保険料のねそういう制度とか猶予があるんで、そういうのを知って、それを利用して、催促状はね大丈夫にしました。

利用してから、障害者手帳、障害年金を申請して、それも通りました。なかなか障害者年金って通りにくくて、国民年金払ってる子はね、2級からじゃないと通らないんで、なかなか難しいんですけど、何とかとおりました。そのあとは、うちのスタッフさんでやめる方がちょうど出たんで、仕事の話とかしてもね、もう絶対嫌い絶対やりたくない、そういうことなんか絶対したくないとか言って、もう拒絶反応もすごかったんですよ。

そのときにスタッフさんがやめるっていう人が出たんで、どうや手伝ってみいひんかっていう話をしてくれて、宮西先生がね、やってくれたんで、そしたらねそのねえときに、快くね、了解、了承してもらってびっくりしましたね。働くの嫌やなあって言ってたのになあって思って。やっぱりその子は仕事や働くという言葉には嫌悪感を持っていて、何か、いろいろこき使われたり、悪く扱われたりするんじゃないかっていう思いが強かったみたいですけど、本人は利用者の延長線上だったから働けたって言ってました。

で、その仕事内容もものすごい彼、頑張ってくれてね不登校児やひきこもり当事者への英語の学習支援、話し相手、当事者と一緒にスポーツとか、ボードゲームを一緒に行ったり、支援事業所への同行や、訪問相談、あと相談自体も個別相談もね、ちょっとしたのをやってくれたりとか、あと電話対応、事務作業、動画編集、ひきこもりのときのことを当事者に語ったり、あと講演会への登壇とかもやってくれて、すごいね。草刈りを手伝ってくれたりもしました。だから仕事内容も、ものすごい幅広いです。

彼は、現在紀北の方に行っていてまして、そっちでひとり暮らし、もう親、特に父親とか、ものすごい苦手らしいんで離れたいってずっと言ってたんで、夢かなったんか、紀北の方に引っ越して過ごしてます。

今はヴィダ・リブレで2日働いてもらって、あとは発達障害を持った子供たちに勉強を教える仕事っていう、うちと違う仕事を2日間やってくれてて、すごい頑張ってくれてます。ってことで以上です。

西脇: はいありがとうございます。

当事者同士のつながりとか、そうしたきっかけで変わっていける、とてもすごいと思います。

他のパネリストの方でうちとこでも似たような事例あるよとか、これ共感するよとか、そういった面で御意見あれば、お伺いしたいんですがどうですかね。では南さんどうぞ。

南: いつもねヴィダ・リブレさんのお話をお聞きしたりとかお邪魔させてもらったときに、結構参考にさせていただくんですが、実はヴィダ・リブレさん、元利用者の方とか元当事者の方っていうところの力を非常に上手に使っておられるなと感じるところがあります。

居場所をすごく実際に現場で僕も関わっていると思うんですが、実は居場所で 1 番の支援者って誰かって考えたときに、実は利用されてるメンバーさんだったりすることってというのがたくさんあるんです。例えばあの人がいるから行きたいよと思っていただけたとか、また、そうしてくれる人が、いるから行きたいよって言うてくれるっていうことで、そこから支援がものすごい広がっていくことがあります。そこにはですね、我々支援者には出来ない支援っていうのが、たくさん居場所にはあるのかなっていうのをやっぱりヴィダ・リブレさんの活動とかを見てると、すごくこう感じる部分というのがあのかなというふうに思っております。

西脇：はい、ありがとうございます。他はどうですかね。永井さん目が合ったからいつとく？

永井：僕も当事者、経験あってっていうのもあるんやけど、さっき言われてたように、集まってくる人たち、利用者さんとか関係なく、そこに居てる人たちがその場の雰囲気をつくって、そこになじんでいったりなじめなかったりっていうことがあって。

当事者からできることとかもあるかもしれへんけど、多分そうじゃなくってその人その人って、何かひきこもってたから、ひきこもってなかったからじゃなくて、それぞれ皆やっぱりしんどい経験、そこでひきこもったかどうかで当事者か当事者じゃないかみたいなことあるけど、多分みんないろんな悩みがあり挫折があったりとかして、それを何か乗り越えてきてって、何かそれをうまく共有出来たら、仲間意識っていうほどじゃないんやけど、何かグループ感みたいなのが出てくる。

僕が実際に感じたことで、所属感っていう言葉を思いついたことがあんなけど、僕、小学校中学校、小学校 2 年生から不登校なんですけど、小学校行ってるときって何か分からんけど、後から思ったら、そこになじんでなかったなあみたいな感じを受けて。それは何か、ほんまにグループの中に自分が居てええんやなあとかっていうふうに思えた瞬間っていうのがあって、それが何かグループの安心感っていうのを得た自分があって、これを僕は持てなかったの、学校行けなかったのかなって思ったことがあったんです。

でもそういうのをかもせる仲間っていうのが、利用者だったり、ピアサポートだったりとかっていうところに出てくるけども、それは多分、挫折感だったりとか、苦しんだ経験とか、乗り越えてきたことだったりとか、そんなのがそういう評価を受けることもあると思う。

別にそのとこに、何があるってわけじゃないけど、ひきこもってる人はこの人も元ひきこもってたんやでって言ったときの安心感みたいなものがあるのかなっていうふうに思います。

西脇：はいありがとうございます。パネリストの皆さん、お話の中でうんうんて同じようにならずにいるあたり、やっぱり共感する部分が多々あるんだろうなっていうふうなことで、やっぱりこう、人って良くも悪くも、いろんなものを積み上げて、今に至ってると思うんです。

それがどこでどういうふうに生かされてるかって、人それぞれですし、タイミング場所っていうのが、みんな同じっていうわけではない。でも、もしかしたら、こういうふうなひきこもりの経験、そこで積み上げたものがそういう支援員になるっていうきっかけ、そこでぱっと周りに対する良い影響であったりとか、自分にとっての転換点になったとか、とても良い可能性があって、すてきな話だし、ただ、みんながみんなそれを目指すっていうわけじゃなくて、それぞれが自分の中につなげたものを、それぞれの場所で花開かせていけるような、そういうふうな可能性を感じさせてくれる話として、ああいいなあと感じさせてもらいました。

では、時間もないので、2 例目の事例をお願いしたいと思います。長内さんお願いします。

長内：はい、ありがとうございます。EL-BASE の事例を報告させていただきます。

EL-BASE の基本になっているところが、私も実は田辺市のほうに 7 年ほどスクールカウンセラーで通わせていただいてまして、田辺市での経験が今ここに繋がってるなというふうに思います。知っている先生方、サポートしていただいている方、今日もいらっしゃるんで

すけど、すごく安心しながらお話できることありがたいです。

実際、EL-BASE の方の事例なんですけれども、その前に一つだけお伝えしたいのは、私も、理事長のほうも、スクールカウンセラーとして入っていく中で、やっぱり相談に来るっていう敷居が高いよねっていうお話がちょっとありました。

なので、小学生だったり中学生だったりとかも、まず遊びを取り入れたりとか雑談してから話せる関係になってから、話がやっと、実はおうちでこんなことがあった、学校こんなことがあった、こんなことがいやだったっていう話がポロポロ出てくるという経験をたくさんしてまして、なのでボードゲームだったりとか、遊びっていうところを大事にしている事業所です。

では、御報告させてもらいたいと思います。高校中退後にひきこもった A さんっていう子です。まず、最初、本人は来ていません。お母さんの方が、こういう場所があるからって、町から紹介されてきてくれたんですけど、まず最初はお母さんの第一声「この子はずっと引きこもったままなんですか」みたいな。で、「私の育て方がきっと悪かったんだと思います。」お母さん、離婚されてずっとお母さんだけで育ててきて、「仕事ばかりでこの子に構ってやれなかったんじゃないか」そんなことも話をしてくれました。実際そのときの本人の状況としたら、実際、お家の自室の中からは出てこない。お母さんとも御飯は一緒に食べない。もう基本的に部屋の中で御飯を食べて、お母さんが部屋の前に料理を運んでいって、食べ終わったらまた廊下にあるやつを引上げていくみたいな感じの状態でした。

本人の方は、普通高校に入ってたんですけども、ちょっとクラブの人間関係がうまいこといなくなかって、中退してしまって、そこから身体症状がいろいろ出てきてしまったりとか抑うつ状態になり、実際にひきこもったっていうようなお子さんだった方です。で、通信制高校に在籍してるけど、なかなかちょっとスクーリングとかもうまうまういなくて、このままどうしたもんかなということで相談にきてくれました。実際は本当にこう布団の周り、まああるあるかなと思うんですけど、布団の周りに飲み物を置いて、タブレットがあってゲームがあって、部屋出るときはトイレだけみたいな形の生活を送って、昼夜逆転もしてました。

御飯の時、配膳の時ですね、そこだけは出てくるけど、会話もほぼしない。で、何かちょっと心配になったお母さんが声かけるけど、いらいらして「うるさい」「黙って」「来るんじゃない」みたいなことを言って、言葉をかけることも難しいような事例です。

うちのひきこもり支援はこういう段階を大事しています。まずは、本人から出会えた子に関しては個人支援っていうところから進めていくんですけど、基本的にはお母様とかお父様とか保護者の方が、来ることが多いです。なので、まず家族を支援していって、だんだんと本人とつながるきっかけを探っていって、本人につながってやっとちょっとずつスタッフ、当事者のスタッフを使いながら、居場所につながっていって、集団に戻っていって、そこから、うちは就労支援とか学習支援はしてないので、地域にある、そういったところに、リファールをしていくというか、つなげていって、どんどん社会に馴染んで行くようなことを目指していっています。EL-BASE の担うところは、この三つのとこです。

実際、この子がどんなふうになんか変わっていったかっていうところなんですけれども、まず、家族がまずお母様もかなり悲観的にやってました。なのでまず家族全体が生活楽しめるようになっていうところを意識してサポートしていたんですけど、生活がきつくなるけどお母さんは、今は仕事をやめた方がいいんじゃないかな。友達とお茶も行きたいけど、でもあの子だけ置いていくのも、親としてあかんのちゃうかな、こんなひきこもっている子を置いてちゃ駄目なんじゃないかみたいなことを最初言っていました。でもそこはお母さんも、やっぱり元気に生活して欲しい、楽しんで欲しいという思いがあるので、まあ「今よりちょっと楽しくなるきっかけ探し、お母さんもだし本人も一緒に探していきませんか」という感じで進めていきました。

実際私も、北海道から和歌山に来て、ほんと和歌山大好きすぎて、いろんなところを旅しながらカフェ探したりとかしてるんですけど、いろんな人たちに「いいとこないかな」とか聞きながら、まあそんな情報を、例えば「有田にこういうカフェができたよ」「海南にこんなのができたよ」「和歌山にこんなのできたよ」「田辺、ちょっと足をのばせばこういう面白いところが

あるよ」っていうのを、まずお母さんに伝えていきました。そうするとお母さんがちょっと元気になっていって、「じゃあ、友達とお茶行ってみようかな」。で、行ってみたときに、子どもどうでしたって聞くと、「いや、意外と普通やったんです。何も連絡なかった。」「ああ、こんな経験してもいいんだって思った。」っていう話をしていって、そん中で、お母さんが楽しくなってくると、本人に今までは、将来の話とかで、高校どうするんや、スクーリングどうするやみたいな話をしていたところが、「この前、お母さんこのカフェ行ってきてめっちゃおいしかった」って言って写真とかを見せるようになってきます。そうすると、何か子どもの方が、「何か外の世界、ちょっと楽しそうかも…」みたいなところで動き始めて、本人の趣味を聞いてくる。古着が好き、漫画好きだった話があったので、「大阪でこんなイベントあるよ」、「和歌山市内の方に」行くと、こんなイベントがあるよ」っていう情報をお母さんに流してもらいました。そうすると本人がどうなったかっていうと、最初、お母さんだったんですけど、ちょっとずつ、何かそんな楽しい話をお母さんとするようになったので、御飯一緒に食べてもいいかみたいな感じで、家の中で御飯を食べたり、外食に行けるようになっていきました。あとは、単車の免許を自分で取って、ふらっと、ひとり旅みたいな感じで町内回ったりとかあったりとか、有田川町、絵本の町で今売り出しているんですけど、絵本のたくさんあるような図書館行き始めたりとか、ちょっと広がっていきました。

実際、大阪の方まで、「古着買いに行こうかな」とか「ギター買いに行こうかな」って。「ぼっち・ざ・ろっく」っていうのが一時流行ってたんですけど、ひきこもってた子がロックをやって変わっていくみたいな物語のやつですね。それにハマったときに、ちょっとギターを選びに大阪まで行った、みたいなことが出てきました。

お母さんと、順調に何となく、生活楽しくなってきたね、回復してきたねって思ってたんですけど、冬がきます。なので寒い、外出がづらいって言って、自室にまたひきこもって昼夜逆転生活がまた始まってしまいました。そのときに、私たちのほうでは余り悲観的にならずに、あっ、ちょっと冬眠期間だね、本人寒いって言っているし、そんなに深く考えずに、やり過ぎそうかって話をしてきました。実際その時期っていうのが通信制高校の課題が締切りだったり、テストとかがあって、現実を向き合わなければならないっていう葛藤もあったんだと思います。

でも、そのときにもあまり悲観的にならず、お母さんとは今ひきこもりっていうか冬ごもりの時期なんだったら、家の中でできることは何かあったらというのをお話ししてた中で、「ペットのお世話とかやってくれてるかも」とか、洗濯そういえば、「たたんで」って言ったら、前はたたんでくれなかったけど、たたむようになってきましたとか、頼めば御飯を炊いてくれるようになりました、みたいな話が出てきてました。そういったところで、お母さんそれだったら本人に、お家の中の役割として与えたら、ちょっと助かるし、本人の達成感になるかもねみたいなことを言いながらやっていくと、お家の中では、本当に元気に過ごせるように変わっていきました。

で、春になり、実際どんなになったかという、本人も「春になったら、また動くから」ってちゃんと宣言してました。なので、本当に春になったらこの子は動き始めて、ちょっとずつ昼夜逆転、改善していきました。お家でも、お家の手伝いだったりとか、おじいちゃんおばあちゃんがちょっと農家されてるんですけど、農家の手伝いに行き始めたりとか、あと、やっと 18 超えたから、自動車学校行こうかな。ただ、人数が多い春休みには行きたくないから、ゴールデンウィーク明けたら行くわ、みたいなことで、ゴールデンウィーク明けたらちゃんと行き始めました。

実際、進路を考えなければってなってきたときに、今までまだ本人は EL-BASE に来たことなかったんですけど、やっとお母さんから、そういえば前、お話してた EL-BASE ってとこなんか行ってみようかな、自分のこと気になってきた、みたいな感じで出てくるようになりました。

そのときに、本人と一緒につながっていった、ケアサポーターと一緒にになりながらボードゲーム遊びを通して、まずはワイワイしながら雑談しながら関わっていく中で、何か先輩そ

ういいうえばなんか専門学校へ言ったって聞いたんですけど、それ、どんなところですかみたいな話がちょろっと出てきました。実際、自動車学校も通って、お母さん乗せて、たまにはカフェにも行ったりとかしてくるっていう。

実際、本人とつながる前からそうなんですけど、つながってから、家族と本人と、私は作戦会議って言いながらよくやってるんですけど、その作戦会議、一緒になりながらやっていってちょっとずつ自分の自信の回復とか、自分探しをサポートしていけたらなっていう風に思っています。きっとこの子も今進んではいますが、また、1 回社会に出てから戻ってくることもあるだろうなあと。あと、居場所っていうのは、何か卒業っていうのがきつないんだらうなと思います。なので、ちょっとこうゆるっと関わっていきながら、ちょっとこう、エネルギーをためたら外に出て、世界を見て楽しんできて、ちょっと疲れたなと思ったら一緒に帰ってきたりとか、あとこういううれしい報告があったよって帰ってこれるような、そういったところが居場所の力としてもあるのかなと思ってるので、そういった居場所を運営しながら、こういうふうにサポートしていけたらなと思ってます。

ただ、こんなふうにうまくいくのは一例で、実際お母さんのサポート、やっぱり 1 年 2 年。かなり長い支援になる場合もあると思うんですけど、根気よくお母さんと、お母さんだけじゃないですね、家族が元気になる視点っていうのが、私は大事なんじゃないかなっていうふうに思ってます。以上です。

西脇: はい、ありがとうございます。この事例なんかも、本当にまだこれからっていうことで、続きの報告をね、ぜひ聞かせていただけたらなというふうに期待するところです。

中にありました、お母さんの「私の育て方が」いろんな場面場面でそういうふうな話を聞くことがあるんですけども、やっぱりこう、なかなかこう、追い詰められちゃうと、前向きに物事を考えるのが難しくなるっていうのも、いろいろあるかと思います。そういうふうな中で、お母さんの悩みを受け止め、本人さんの世界を広げる支援をしてくれたっていうのは、とてもすばらしいなと思います。

似たような事例とか、似たような場面と違って、皆さん接してると思うんですけども、こういう部分、共感するよとか、こういう場合、こういうふうな関わり方もあるんじゃないかなっていうふうなところで御意見をいただきたいと思うんですが、野中さんどうですか。

野中: そうですね、お母さんや家族の方の不安っていうのはいっぱいあって、まず、例えば引きこもって相談に来てくれたときに、僕らとしてはもうゆっくりしてたらええよって言うんですけど、ほなお母さんが、もうそれこそこの前もあった話ですけど、この子が働こうと思って、例えば就職面接に行ったときに履歴書を書かなきゃいけない。履歴書のところで 3 年くらい空白がある、5 年空白がある、7 年空白がある。その空白期間なんて書いたらいいんですかってやっぱり聞かれるんです。確かに空白期間があるのはひきこもりという状況の中であると思うんですけど、例えばその就職面接を受けに行ったときに、A という会社は、これはもうこんな空白期間があつたらもううちの会社では雇えませんと、もっとばりばり働いてもらわなあかんからもうね、身を粉にして働いてもらわなあかんからうちではいけませんっていう会社か、B という会社は、5 年間家におったんです。いろいろそのときは大変やったやったよね、しんどかったと思うけど、そこでも経験を積んじゃあるさかい、またうちの会社でゆっくり育てたらええわよって言ってくれる会社、お母さん A の会社選ぶ、B の会社選ぶって言ったら、当たり前っていうか、B の会社皆さんも多分選びたいですよ。

だから、何を言いたいかっていうと、今までの価値観、長内さんところもそうかなと思うんですけど、その居場所っていうのは価値観を広げていく場所、今までひきこもっている状態の部分でどんどんその価値観が狭まっていく。その狭まっていた価値観をもう 1 回こう広げていくっていうふうな仕事を居場所ではしているのかなあとと思います。以上です。

西脇: はい、ありがとうございますね。

僕も福祉に携わってるんで、悲観的なところからね、どう引上げていくのかってすごい難しいなって思うんですね。よくあるのが、不幸の犯人探しのところに終始して、なかなか前に向かうための、新しい取組とか、可能性とかに興味を持てないというか興味を持つ余裕を持てない。そういったときに、どういうふうなかかわり、どういうふうな姿勢で関わることで、不幸の犯人捜しの輪っかから外れて、初めて次の一步を踏み出せるのかっていうのが、個人によって違うんですけど、やっぱりこういうふうな対人援助職やってると、ぶつかる壁かなと思うんです。

そういったとこで、こういうふうなことでアプローチしてみた、みたいなのところをちょっと南さんとかあれば教えてもらえますか。

南: はい。本当に今、西脇さんが言われたみたいに、やっぱり支援のすごく大事なポイントとして、原因や責任を探さないというやり方っていうものもすごく大事ではないかなと思います。

というよりも、探しても今ある課題や問題が解決するわけではないんですよね、という認識を保護者の方や本人もしっかり持つこと、持てるようになることってすごく大事なかなと思います。

つまり、子供だけが悪いわけではないし、親が悪いわけでもない。お互いに苦しめる状況なんやから、お互いに少しでも楽になれる方法を一緒に考えましょうっていうのが、先ほど長内さんが言ってくれた「作戦会議をどれだけしていけるか」ということにつながってくるかなと思うんです。

もう一つ、EL-BASE さんの話の中で、ええなと思ったのが冬眠期間。これは僕らでいくとやっぱり行きつ戻りつをどれだけできるか、どれだけでも行きつ戻りつができる環境を整えることってすごく大事なかなという風に思うんです。それは行ったり来たりができるっていうことはどういうことかという、何度でもやり直しができるんやという安心感や安全感を御本人さんに持ってもらえるっていうことにつながると思うんです。

それが、やはり、自分で頑張っていこう、自分で何回失敗しても立ち上がっていこうという安心感・安全感につながると、多分御本人さんは、いろんなチャレンジをしていこうという気になっていけるんちゃうかなと思うので、そういう環境をいかにつくっていくか、そういう感情本人さんに持っていただけるようにするにはどういう工夫があるかっていうこと、支援の現場としては考えていきたいなという風に思うところです。

西脇: はい、ありがとうございました。永井さんどうぞ。

永井: 皆さんの言葉を聞いて、何か相談来る人とかひきこもってる本人とか、どうやってこの状況を楽しむのかっていうことを考えたいんですけど、楽したあかんと思ってる。本人たち、家族も含めて、絶対何か楽なことしたらあかんって思っているって思うんですよ。

楽なことこそすべきだし、家族全体が楽しくっていう言葉もあったけれどもそのことってすごく大事なので、何かその辺は、さっき、居場所も大事なことっていうところに「ぬるま湯」って書いたけど、そんなことにつながるのかな。何か駄目なことって思われがち、努力しないとか頑張らないとか。マッチョな世界観がはびこってて、頑張らないとって、頑張ることが魅力、そんな時代もあったのかもしれないし、そういうふうにして世の中成り立ってきたんやろうけれども、何かそういうところで、そうそうじゃないところが大事になっていかないといけないみたいな。それは何か、僕らの努力とかじゃなくて多分世の中がそうなっていかないと、このひきこもりの問題とか、ひきこもっちゃう人達が出てくるってことはなくならないんじゃないかなっていう気がして。価値観広げるっていう言葉っていうのは、自分たちを変えていく、自分たちの思いを変えていくってことじゃなくて、それを広げていくっていうことが大事なかなみたいなことを、なんか思いました。

西脇:きつとね、この会場に今日来られた皆さんが、その第一歩になってくれると思います。やっぱりね、犯人論じゃないんですけど、幸せになる責任が自分にあるとか、幸せにする責任が親にあるとか、社会に責任があるとかっていうふうな責任論じゃないような気がするんですよ。やっぱり、一緒になるべく豊かで幸せな生活ができるとか。よくあるのが、正しい生活と幸せな生活をちょっとイメージの中で混同してしまうとかね。高学歴高収入イコール幸せかって言ったら、必ずしもそうではない。あなたにとっての幸せは何ですか、辛い中、苦しい中にもそれぞれの形で何かしら今よりも望むべきものがあるんじゃないですか、っていうふうなところを尊重する。まずは、自分が尊重されたいと思う以上に、周りの人がその人の価値観を尊重していくような、優しい社会がね、やっぱり少しでも、進んでいけば。それはもうひきこもりの問題だけじゃなくて、障害者であったり、高齢者であったり、児童であったり、いろんな部分で、より豊かな社会につながっていくっていう中で、当事者を経験された永井さんがおっしゃった。その中に、やっぱり当事者が変わることによって変わるっていうだけじゃないよっていう部分はすごいメッセージとして大事なものだと思いました。

日下さんどうぞ。

日下:うちの宮西先生だったら、こんなん言っているんですけど、旅行行ってほしい、親御さん。1日でも2日でもいいから、新婚旅行じゃないけど、結婚の記念とかで行ってきてほしい。やっぱりね、こもってる人をちょっと下に見過ぎちゃう感じじゃなくて、案外、一定お金だけ置いていても、20~30の人らの話なんですけどね。行ってきても、案外生活出来てますよ。案外その知らんだけ、夜起きてきて勝手にレンチンの御飯を作って食べてたりするんでね。逆に、おらんことによって、家の中も自分だけのフリースペースみたいな感じになったりするんで、だから、気兼ねなく行って欲しいですね。何かしんどいよって、お母さんだけ思われてもね、じゃなくて、親がちょっとずつそういう好きなことをやらせてもらうのが、ひきこもってた本人からしたらやっぱりええんかな。そしたらちょっとずつ空気が変わってくるんで、それで楽しんで、ちょっとずつ家族で段階を踏んでもらえたらなと思います。

西脇:そうですね。親が元気で幸せそうであってこそ安心してひきこもっておられますもんね。親が不幸な顔をしてたら安心して引き込まれませんもん。親が病気になるかもしれないと思ったら、ちょっと不安になってくるんで、やっぱりそういうことを考えて、なんか悲壮感あまり漂わない家庭っていうのがすごい大事なかなと思います。

こういう話は尽きないんですけども、事例については一旦ここで終わりにして、次のテーマについての話をさせていただきたいと思います。続いてはですね、今の事例や取り組みを皆さんに御紹介させていただき中で、すごい頑張って、頑張って言いはちょっと上から目線で失礼ですけど、きちっと専門家としてプロの仕事を一生懸命されてる、しっかりされてるっていうのはすごい分かっていただけたと思います。ただ、このひきこもり支援というふうな事業そのものは、制度的にまだまだ脆弱です。その上で、このひきこもり支援というふうな仕事にかかわりながら、それを継続していきたいと思いながらも、いろいろ制度の壁であったりとか、やっぱり支援策が十分じゃないっていう風なところでの悩みっていうのを各居場所さん抱えておられるかと思います。

これからですね、居場所の運営の中で抱える課題について、話を進めていきたいと思っています。皆さんの御手元にある、居場所の紹介の紙ですね。居場所を運営していく上でどんなことが課題、すごいかわいい字体で書いてるんで、内容もね、かわいらしい内容になってるかなと思ったら全然そんなことはなくてですね、まず財政上の問題があります。人件費等の問題、人材確保の問題。設備・機器等、そういうふうなものが非常にづらいんですよ。大体似たような共通する課題があるんです。その中でね、皆さんからも、多分共通する中で今1番苦労してて、悩ましく感じてるのはこれだっていうふうなことを。ほんまは共有したくない情報なんですよ、こんなしんどい情報なんて。ただ、この支援をね継続していくためには、足りない部分を知ってくださいっていうのは必要になってくるので、ちょっと皆さんにお

願いでしゃべっていただけたらなと思います。

そしたら、長内さんの方から順にお願いしてっていいですかね。

長内: はい。資料、恐らく居場所の紹介のやつの中に EL-BASE の課題書かせてもらってるんですけども、さっき事例で紹介した彼とかもそうなんですけど、私たちとしてはすごくスカウトをしたい子たちがたくさんいます。

ただ、その子たちを雇いたいなってなったときに、財源が足りなかったりってところの問題がまず一つってところと、うちまだ土曜日しか開所はしてないんですけども、利用者が増えてく中で土曜日だけじゃ、ちょっと枠としては足りないなってきてます。でも、それもやっぱりお金の問題が関わってくるってということと、今、私たちのところ有田川町限定でさせてもらってるんですけど、ありがたいことに周りの市町村の方からも使えないかなあって言ってくれるんですけども、そこもやっぱり町のところから出していただけてるってところもあるので、そういった縛りがあったりします。なので、和歌山全体でとか広域でサポートできるっていう仕組みが出来ていくと、そういった子たちもいろんなサポートしていけるのかなと。

ただ、私たちもそこを一つの事業所で抱え込もうっていうのは思ってはないので、そういったところのサービスを、いろんな居場所さんたちと連携しながら、いろんな人が使えるっていうようなネットワークができるといいんじゃないかな、というふうに思っています。

はい。そこがちょっと課題かなというふうに思ってます。

西脇: はい、では次、日下さんお願いいたします。

日下: はい。ヴィダ・リブレは圏域内外の方が利用できるようになってるんですけど、圏域がちょっとね限られてて、例えば日高圏域と、有田圏域の方々は無料でいけるんですけど、それ以外の方は有料でやらしてもらってます。また、県外からも来られたりするんで、それも同じ料金でやらしてもらってます。

あと有田の方にも実は居場所がありまして、有田の保健センターで週 2 回、火曜日と金曜日やらしてもらってます。どうしてもねうちでいうと、火曜日から土曜日までやってるんですけど、常勤が自分だけなので、もう 1 名分はあるんですけど、それをちょっと分割してアルバイトの子に来てもらってるという感じでやらしてもらってまして、ちょっとねその点でどうしても、5 日あるうちの常勤 1 名っていうのはなかなかね厳しいところもあるんです。それと、最低賃金でやってますんで、そういうのね増やしてあげたら助かるなと思っています。

西脇: はい。この「支え手」問題ってね本当にね、あちこちで大問題になっています。うちとこでも大問題になってるところです。

はい、永井さんどうでしょうか。

永井: 以下同文みたいな感じですね。もう、お金が足りなくて人がなくてっていう、昔から今の事業をやってて、2.3 人ぐらいやってるんですよ。だけど、多分ちゃんとやろうと思うと、大体 5 人はいる。居場所担当の人 2 人、相談の人 2 人、何か配達とか会計の人とか、まとめる人とかって感じで 1 人みたいな感じで。それぐらいはいるんやな、今の規模やってくにしたって、それぐらいはないとなかなかこう、必要な手だてっていうのも組めていかない。訪問したいよって言っても、1 人しかいてないので出て行けませんみたいなことがある。

そこが問題なんだと、ちょっとその圏域越えてっていう、そもそも、うちなんかはいろんなサポート事業やったりとか、ステーション事業やったりとかっていうのになる前からやってるもので、県の事業でやってたので、そのこともあんまりとか考えずに良かって、どっから来ても良かったんで、ずっと継続して関わってる人なので、仕組みが変わったからってもう来れませんかと言えないので、今までどおりずっとやってるけど、何か実績としての数には数えられなかったりとか。それは何とかしてほしい、何とかしてほしいっていうかしますけどみた

いな。しますけど、だから何とかそのお金くれっていう話ですけど。まあ、長くやってるので 20 年前に建物を建てましたけど、まだ大丈夫ですけど、これから先はちょっと心配。そこでまたお金かかってくるし。で、単年度契約みたいなのはもう本当に勘弁してほしい。

支援の中身でいうとそれこそ 20 年来の付き合いの人がおって、間はごそっと抜けてんですけど、何か、去年うちの理事長が亡くなって、ずっと最初立ち上げの頃から相談に来てくれる先生も、なかなかこう出てくるのが難しくなっている状況があって。その関わっている人が、理事長亡くなったっていう話を聞いて、電話くれて「私、相談行ってもいいですか」みたいな電話があって。誰も知っている人がいなくなってしまう、そこが自分の居場所じゃなくなるみたいな思いを持って、電話をかけてくれたんですね。そんなときはたまたま僕がおって、電話出ることができたんで、「永井です」っていうて、いつでも来てくださいねって。実際は来てないんですけど、そこで、ひとつ安心感。この間も何か「秋の間、休みあるんですか」みたいな電話があって、そこにつながり、その人の心の支え、心の杖みたいなものになって、生活を支えていることになれているのかなと思うので、続けていかないと意味がないので、続けられるような制度設計みたいなものをぜひとも、っていうところを思っている。

西脇: はい、ありがとうございます。やっぱ僕とこなんかもそうなんですけど、何かしらの制度に基づいて福祉サービスとかそういうふうなものを提供するってなると、元にあるサービスの範囲の中で来てくださいね、っていうのがどうしてもついてくるんです。もちろんそういうのを飛び越えて、必要な支援することもあるんですけども、それは、エイヤっていうふうに思い切って、そのときだけの劇的な措置っていうのが一般的なんですよね。やっぱ、長くこう普遍的サービスを提供していこうと思うと、制度そのものがやっぱ実態に即したのになってくれないと、安心してサービスの提供をしていけない。その辺のことにとっても詳しいのが、野中さん。なので、野中さんにそこら辺の今、抱えてる制度矛盾、やっぱあってほしいなところなんかを話してもらいたいと思います。

野中: はい。制度の矛盾ってね、そうなんです、ひきこもり問題＝労働問題というふうにとらえられてきた中で、労働問題としての制度っていうのはちょくちょく出てきて、そこが中心になっていたっていうのが日本の国策としての僕は間違いだと思っています。

あくまでもそのひきこもりのね課題っていうのは、青年期や成人期の育ちの保証をどう考えていくのか、その育ちっていうふうなところに、どういかに制度としてお金をつけていくのかっていうところが、日本は余りにも手薄やったっていうふうに思います。

近くの国の韓国ではですね、青年手当っていうものがあるって、18 歳かな、19 歳かな、の時に半年間やったか一年間やったかちょっと忘れちゃった、ずっとね手当がつくんですね。多分 40 万ウォンやから、月々 4.5 万円の手当を青年が受けることができる。それを学びのために使ってもいいし、いろんな活動のために使ってもいいし、例えば起業のために使うっていうね、そういうその育ちの保障というふうなところを、やっぱこう日本でもきっちり制度化していくっていうことが必要なのかなと思います。

ピアスタッフさんの役割も非常に高いものです。ね、今日話を聞いていただいても本当に高い。ただ、ピアスタッフさんのお給料はね、いわゆる支援者と言われている人の給料よりも低いことが多いです。安上がりにピアスタッフっていう名前で使われてるんじゃないかっていうところにも非常に課題を感じているので、ピアスタッフを安上がりにしないっていうのが大きなところかなと思います。

西脇: はい、ありがとうございます。では、同じテーマを引き継いで南さん。どうしても、本来こういうふうな制度であってほしいというふうなものも含め、課題をお願いします。

南: やはり今、若者の問題を労働の問題からとらえていたところが、今度はですね、ひきこもりの問題ちゅうか、生活困窮の問題として、生活困窮者を支援するという枠組みの中で、

ひきこもり支援をっていうふうな国の流れになってきています。少しひきこもりの支援についてお金がつき出したっていうところについては、我々としてはありがたい部分がある反面です、生活困窮者で生活が困難になるから支援が必要というふうにだけされてしまうのはちょっとまた違うんじゃないか、それこそ今野中さんが言ったみたいに、生き方の保障っていうか、そういう部分での施策っていうのがやっぱり必要になってくるのではないかなっていうふうに思ったりもします。

その中で、我々の支援ちゅうのはやはり時間がかかることが多いです。やはり長く関わっていくことにすごく意味があったりとかですね、そこに人との信頼であったりとかですね、そういう信頼や思いをどのような形に変えていくのかっていうのが、僕らの仕事の一つだったりするのかなって考えたときに、やはり1年単位でしか契約が出来ませんよとか、保証が出来ませんよというような形であると、やっぱり長く続けていくという視点を、支援者側の気持ち次第に押しつけてしまうことになりかねないかなというふうなところがあるので、そこらのところってのは僕らも現場の中でやはり出てくる課題をこれからも声を大きくしていきながら、皆さんの思いなんかもいただきながら、どんどん上に上げていきたいなというふうに思っております。

今、限られた中で厳しい中でも、我々なりに全力をもって、相談に来てくれる方に、真摯に向き合えるようにという思いを持って皆さんが頑張っていていただいておりますので、そこら辺、また皆さんからの御協力をいただきたいなというふうに思いながら、こういう課題がありますというような報告をさせていただけたらと思います。

西脇: はい、なんかね選挙の応援演説みたいに「お願いします」みたいになっちゃいましたけど、本当に切実なんですよ。僕なんかもそうなんですけど、今団塊ジュニア世代って言われる世代です。ここまではある程度人がいます。多分、野中さん、永井さんなんかも同世代です。

ただ、僕ら世代交代ちゃんとしていけるのかな、っていうのはすごい不安です。今、障害福祉サービスであったりひきこもり支援であったり、それが福祉サービス。今、従事して頑張ってる人がきちんと世代交代して、事業をつなげていけるかどうか。その繋いでいこうと思ったときに、引受けてくれる人が安心して働いてくれる環境がそこにあるかどうか。お願いしたい、引継ぎたい人いません、引き継いでもらえそうな人材いません。の数歩手前っていうのが、いわゆるエッセンシャルワーカーと言われる福祉業界の全般的なねベースにある問題なのかなというふうに思っています。そういった中でいうと、生々しく、やっぱここがしんどいっていうふうな話を皆さんと共有することが出来たのかなと思います。

はい、ということで、ここまではちょっとしんどい話だったんでちょっと気分を変えてもらいたいんですけど、とはいえ、今日の主題は「居場所の可能性」です。可能性っていうのは未来に向けた課題だと思います。皆さんの胸のうち、やっぱりこういうふうな支援をして、こういうふうな取組を進めていきたいというふうな思いがあらうかと思います。そこで、将来、ひきこもり支援っていうのはこうあって欲しいっていうふうな提言、自分の中に感じてる未来像みたいなものを一言ずつ語っていただけたらと思います。明るい感じをお願いしますね。

じゃ、長内さんのほうからお願いいたします。

長内: やっぱり引きこもりとか不登校とかっていう言葉を聞くと、まだやっぱりネガティブイメージ持ちやすいのかなって、日本全体がそうなのかなと私は思ってるんですけど、その相談に行くっていうところが、何ていうかネガティブじゃなくて何か元気になれる場所なんだっていう経験を、私はひきこもりの支援の中でいろんな人に分かってもらいたいなと思うところなんです。

そのために、私たちの法人って自分たちの抱え込まないもそうなんですけど、学校のところとか教育のところと連携をとったりとか、あとはその子たちが回復してきたときにつなげたい福祉サービスがあったりする福祉のそこだったりとか、あとはサポステさんとかも今日来

てくれますけど、サポステだったりとか、就労支援のとこだったりとか、そういうところにつなげるということをすごく大事にしています。そうなったときに、やっぱりそのひきこもりの現場の人たちがいろんなところで支援していきながら、お金の問題だと思ったら、その窓口行ったらいいよとか、みんなで地域で支えるみたいなのところを、最終的には目指していけたらいいんじゃないかなと思うので、こういった機会を田辺市で設けてくれたっていうのはすごく私はうれしくて。

田辺市の方もまた、皆さんがいらっしゃるんで、そういったところにもいろんな人たちが入っていきながら、全体でのサポートっていうのが出来たらいいんじゃないかなというふうに思ってます。

西脇: はい、ありがとうございます。それでは続いて日下さんお願いします。

日下: 僕なんかは最初ね、ひきこもり支援というのを知らなかったし、やっぱり利用するにあたってね、どんなとこなのかも分からなかった知らなかったんで、何か怖くてね、よう行かなかったんですけど、なんで、まず知らないっていうのがね、そういう状況はやっぱり行きにくいってなると思う。前にサポステさんのところでちょっと印南のほうで講演があったんですけどね、そのときに、EL-BASE の小山先生が言うてた話があって、その人にとって、居場所を知らないっていうのがないのと同じって言ってたんで、やっぱりそうやなあって、知らなかったら分からんし、どんなんか分からんから怖いってなって、よう行かんっていうのもあるのでやはりまず知ってもら。今回は来ていただいているんで、まず知っていただいたということで、第1段階ということでやっていただいたんで。あとは市町村との連携というか、そういう感じで、例えば市町村の中での介護関係の所管のところもありまして、前にあった話なんですけど、介護の人のとこに行ってみたら子供さんがおった。知らなかったって言って、30年くらい困ってましたっていうのもあったんで、やっぱりそういうところから声をかけてもらう、知ってもらう、そういう機会をつくって連携していただけたらね、こちらとしても助かりますし、そっから動き出すこともできると思いますので、まずは知ってもらうということが大事かなと思います。

ありがとうございます。

西脇: はい、ありがとうございました。続いて永井さん、パンチのきいた話を。

永井: おっしゃる通りっていう感じで、そこはすごく課題。つながってくついうこと、ここに集まってる他にも、ひきこもり支援や不登校支援やってるところといかに連携していくかっていうこと、市町村も含め。

今年度からうちの予算、倍増したんですよ。和歌山市の人が頑張ってくれて、何とかって言うて、もっと上を目指してたんやけど、そこまではたどり着けんくて。やっぱりそこには、何かこんなことをやってるんやって、このことにすごく意味があるんよっていうことがなかなか伝わらんっていう感触が伝わってくる。だからもっと何か、どう説明したらいいのか、その説明自体うそになったらあかんので、実際どういうことをやってるのかっていうのをすごく聞きに来てくれて。

うん。それはすごくありがたくて、こっちとしては。

行政の人たち、行政の人たちってその人も行政の人なんやけどと思いつつ、どこが壁になってるんやろって思ってた。お金がないって言うけどそんなうそやん。和歌山市だってさ、水道管が折れたらすぐ直したやん。あるんよ。ああいうとこにお金使うんや。使わないっていう話で、そこが大事やそこにお金をかけようって、多くの人に考えてもらわんとあかんから、そのことを通していかんのかな。そんな生活のためやからっていう理由があったらさ、無い金出てくるんやん。どうしたんか知らんけど、お金をどっから出してきたのか知らんけど水道管すぐ直って。ものすごいお金かかっていると思うんや。ちょっと一本分くれたら10年ぐらいや

るでみたいな、多分きつとそんな額やと思うんやけど。

何かその価値観ってなるかもしれんけど、僕らがやっていることって、多分いかに楽しく過ごしていくかみたいなことをしながら、それを楽しそうな様子、深刻な問題ではある、本人にとっては、多分生き死にを考えなあかんような深刻な問題ではあるんやけど、でも、そうかあって、ちょっと置いてこれはどうやみたいなことをやりつつ。何かすごく深刻な問題ではあるんやけど、何かそんなに大層な問題でもないというか、その辺の理解って、なんていうかな。風邪引いたらみんな休みやっていうし、休むのも別に罪悪感なく休めたりするし、休むことをとがめたりしない。

ひきこもるってこともそういう状況なんやっていうことが何となくこう全体に伝われば、その中で、何につまずいてるんかとか、そこで大事なことににつまずいてる。そのことをやっぱりちゃんと経験していかんことを経験出来てなかったりっていうことがあり、それちゃんと保障していかなあかんっていうことに、その大事さに気付いてもらわないといけなくなってる。それって難しいなあっていう話だけど、多分その話なのかなっていうのは、何か見えてきたなっていう気はして。どうしていいか分からへんけど、これから先やるべきことっていうのはその辺のことなのかなっていうふうには思っています。

西脇: はい、ありがとうございます。こういう場でそういうふうな話があることがまず大事なかなと思います。何倍も予算ならないかもしれませんが、まずそこがあって、じゃあ優先順位として、できるところからどうしていこうか。もしかしたら、優先順位っていうのが、まだ自分たちの期待よりもかなり低い部分にとどまってる可能性っていうのがあって、だからこそういふとこで、伝えていくっていうのがすごく大事なかなと思います。

じゃあ次、野中さんお願いします。

野中: そろそろいうことがなくなってきたんですけど、自己責任の話を少ししようと思っていて、うちのメンバーにいろいろこうね話を教えてもらってると、私たちは自立出来てない、精神的自立が出来てないと思うんやということを言うんです。何でってきいたら、精神的自立をしている人は、自己選択・自己決定ができる人。自分たちは自己選択・自己決定出来ない。なんで自己決定・自己選択出来ないかっていうと、決定したら責任を負わされる。自己決定したことについて、あなたが決めたことだからっていうことで、責任を負わされるっていうところ、責任を負わされるときに、自分たちは何の保障もない中で、いわゆるひきこもっているという状況の中でその決定に対しての責任を負わされると、非常にしんどいし、難しいんやということで、自立できないんやっていうようなことを言うんです。

この自己責任で考えたときに、僕らとか子育てをなされたことのある人は、多分子供が決めてきてきたことを途中で放棄したら、なんであんた自分で決めたことをようせんのって怒りますよね。もちろん怒ったこともあるんですけど、けど、自分で決めた責任を、全てねその人の責任において解決しなきゃいけないのかって言ったら、多分社会はそうではない。自分が決めたことであったとしても、いろんな形でフォローしたりだとか、一緒に考えたりだとかして、自己責任だけにならないように社会がサポートするっていうふうなものになってると思うんやけど、けど、自分で決めたことは自分でしなさい、最後までやり遂げなさいっていうね。自己責任論というところに、非常に何ていうかな、取りつかれているというか、そういうふうな状況というのがたくさんあるのかなあと。その辺の、これも価値観かもしれないんですけど価値観を変えたり拾ったり、これは社会全体でこう考えていくっていうふうなことが必要なかなって思っているのと、提言としては、もうずっとねやっぱり笑ってようかと。いろんな怒りがあるし、腹立つことも、なんで変わらんのよっていうこともいっぱいあるんやけど、ずっと笑い続けていくっていうふうなことが、怒りをね、夢と笑いを変えていくようなそんな場所であり続けたいかなと思います。

この前うちの職員で、何言い出すんかなってコツコツと寄ってきてキッチンカー欲しいですって言いに来るんですね。何よキッチンカーって、という話をしたら、要するに家にひきこも

ってるんでね、子供食堂やとか無料の食事会みたいなのをするんやけど、来れない人にとってはそれがつらいことになるんじゃないかと。だからキッチンカーでその人の家に行ってしまったらええやんっていうて、キッチンカーどっかにないですかって聞きに來るんで、キッチンカー今ないな—って話をするんやけど、まあそういうようなバカみたいな話で盛り上がりながら、怒りを笑いに変えていくっていうことが必要なのかなと思います。

西脇：はい、ありがとうございました。では続いて南さんお願いします。

南：はい。本当に、こういうふうにはきこもり支援が進んでいきたいというのは、他の団体さんも皆さん同じ思いやなあというのを実感しております。

なので、ちょっと僕はですね最後にせっかく会場にたくさんの方が来ていただいておりますので、ちょっとこう、皆さんと共有したい部分のお話を最後にさせてもらえたらなと思います。

皆さん御手元にもしペットボトルでも飲物でも持っておられる方は、まず手にとっていただきたいと思います。ない方は多分入り口で今日は熱中症対策で、小さなペットボトルもらったと思うのでぜひ持っていただいたらと思います。

持っていただいたら、人によってこの多さ、重たいとを感じるか、そうでないとを感じるか、人それぞれだと思います。でも、多分持てない重さではないですよね。でもこれを1日じゅうずっと持ち続けなさいと言われたらどうでしょうか。ちょっと、手しびれてきてだるいなって感じると思います。

これを1年間持ち続けなさいと言われたらどうでしょう。もしくは数十年にわたって持ち続けなさいって言われたらどうでしょう。中身の重さは変わらなくても、きっともうそんなん持つこと出来なくなるほど、腕は駄目になってくるかもしれません。

ストレスであるとか、しんどさ苦しさを持ち続けるっていうのはやっぱこういうことなのかな。この持ち続けることの強さを筋力を鍛えたりとかですね、持ち続けることの強さを鍛えるっていうことも時には大事かもしれませんが、やっぱり大事なのはですね、持ち続けるための工夫やと思います。中身を飲み干したりですね、中身を捨てて軽くするっていうのも一つの手やし。もう一つは、こうやって台に置くことなんですね。やはり、時に台に置いて軽くするっていうことをやっぱり大事にしていきたいなというふうに思うんです。そして、我々のような、こういう居場所であったり、支援者っていうのは、その人が置きやすい台を目指しています。本当にその人にとって置きやすくなるような、ポンって置いて、必要な時にすっと取っていけるような置きやすい台を目指しながら日々活動しています。なので、もっとこんなふうにした方が置きやすいでとか、こんなふうな所におまえら置けるようなところに場所置いてくれよというようなところを、ぜひまた皆さんからいろんな御指導とか御協力いただきながら、我々の居場所皆さんが支えていってもらえたらなというふうに考えながら活動しております。

また、私が選挙出たときには、皆さんからの清き一票を入れていただけることをお願いして、最後の笑いを入れた締めになさせていただきます。ありがとうございます。

西脇：はいありがとうございました。以上をもちまして、本日のパネルディスカッションで予定しておりましたテーマが終了となります。



(5) 田辺市ひきこもり検討委員会(令和5年度)議題

(出席者はひきこもり検討委員の人数)

第 1 回(R5. 5. 27) 出席者 25 名	第 2 回(R5. 10. 28) 出席者 26 名
・ 委員自己紹介 ・ 委員改選 ・ 田辺市のひきこもり支援について 令和4年度事業報告 令和5年度事業計画 ・ その他 関係機関の紹介および意見交換	・ 令和5年度 上半期事業報告 ・ 令和5年度 下半期事業計画 ・ 講義 『テレワーカーを選択肢の ひとつにするために』 TETAU事業協同組合 理事・ディレクター 森脇 碌 氏

小委員会(令和5年度)議題(出席者はひきこもり検討小委員の人数)

第 1 回(R5. 6. 15) 出席者 10 名	第 5 回(R5. 11. 16) 出席者 12 名
・ ひきこもり支援啓発 パネルディスカッションについて ・ 小員会の予定について ・ 啓発DVDの作成について	・ ひきこもり支援啓発 パネルディスカッションについて ・ 高校訪問について ・ 啓発 DVD について ・ 令和6年度 ひきこもり支援啓発講演会 について
第 2 回(R5. 7. 20) 出席者 10 名	第 6 回(R5. 12. 21) 出席者 11 名
・ ひきこもり支援啓発 パネルディスカッションについて ・ 第2回 ひきこもり検討委員会 講師について ・ 啓発DVDの作成について	・ 令和6年度 ひきこもり支援啓発講演会 について ・ ハートツリーより報告
第 3 回(R5. 8. 17) 出席者 11 名	第 7 回(R6. 1. 18) 出席者 12 名
・ ひきこもり支援啓発 パネルディスカッションについて ・ 第2回 ひきこもり検討委員会 講師について ・ 啓発DVDの作成について	・ 令和6年度 ひきこもり支援啓発講演会 について
第 4 回(R5. 9. 21) 出席者 12 名	第 8 回(R6. 2. 15) 出席者 7 名
・ ひきこもり支援啓発 パネルディスカッションについて ・ 第2回 ひきこもり検討委員会 講師について ・ 支援の報告	・ 令和6年度 ひきこもり支援啓発講演会 について ・ 支援の報告
	第 9 回(R6. 3. 21) 出席者 13 名
	・ 令和6年度 ひきこもり支援啓発講演会 について ・ 令和6年度 第1回ひきこもり検討委員会 について ・ 令和6年度事業計画(案)について ・ ハートツリーより

(6) ひきこもり検討委員会 講義

『テレワーカーを選択肢のひとつにするためには』

講 師 : TETAU事業協同組合 理事・ディレクター
森脇 碌 氏

日 時 : 令和5年 10 月 28 日 14:00~15:00

参 加 者 : 35 人(事務局含む)



【講義内容】

皆さんこんにちは。

TETAU 事業協同組合の森脇碌と申します。

今日は貴重なお時間いただきましてありがとうございます。

今日はですね皆さんに我々がやっているテレワークという働き方を知っていただき、そして皆様の御支援に役立てていただきたいなと思っておりますので、お願いいたします。

今日は、テレワーカーを選択肢の一つにするためにはということで、御支援されている中で、パソコンの仕事という選択肢があるんじゃないかなというふうに思ってもらえる方が多いんじゃないかなと思います。

このテレワークという選択肢、皆さんが支援になるんじゃないかと思われるように、必ずあります。可能性というのは非常に大きいというふうに我々は考えています。ただですね、それを進めていくためには、支援する方々の知識とか、それからスキルが絶対的に必要になりますので、ぜひ今日はそこを何となくでも分かっていただけたらなと思っています。

まずは家で働く私たちということで、TETAU 事業協同組合の説明をさせていただきたいというふうに思います。我々全員、家で働くチームでして、TETAU 事業協同組合というふうに、ちょっと聞きなれないですね。協同組合、つまり我々は法人格を持っていますけれども、会社ではなくて組合という形で活動しています。

「世界で1番凸凹なデザインファーム」というキャッチフレーズで活動してまして、実はこのキャッチフレーズ、そこにいらっしゃる浅井先生の講義の中で、私たちのコアなメンバーでキャッチフレーズつくりましょうということで作らせていただいた、とても気に入っているキャッチフレーズなんです。世界で1番凸凹な、この「凸凹な」ですね、ここが今日はもう一つのキーワードになってくると思いますが、いろんな方がいる我々のデザインファーム。

デザインファームって何だろうってことなんですけども、デザインっていうと、何となく装飾とか、色とか彩りとかですね模様みたいなイメージがあるかもしれませんが、実はデザインというのは、計画とか設計という意味なんです。我々、課題解決や価値創造というのを主体にして、いかにそれを設計・計画するかということをお仕事にしております。

そんな何かちょっとよく分からないと思うんですけども、今日のテーマになるのは全員が家で働いているということなんです。一応上富田町に拠点があるんですけども、誰も行きません。行っても誰もいないんですけども、全員が家で働いてまして、そして我々はどこに通っているのかというと、バーチャルオフィスですね。今日土曜日なんで、誰もいないと思うんですが、せっかくなのでちょっと入ってみたいと思います。やっぱり誰もいないですね、残念ながら空きなんですけども、こんな形でインターネット上にオフィスがありまして、何かあったときにはここに通ってくることになっています。大体ここに入ってきて、お仕事するメンバー50名ぐらい。ただ出勤義務はありませんので、打合せしなきゃいけない時とか寂しい時とか、わかんないことがある時だけ、来るというふうな仕組みになっています。

バーチャルなので私のアイコンが動きますけども自分の好きなところに行ってますね、そ

して今誰も居ませんが、誰かが居ると、ここで画面が映って、お互いの顔を見ながらお話できるという仕組みになっています。なので、誰かがいれば、こうやって顔が映って、普通に会っているのと同じようにお話ができる。なんなら会っているよりも顔がはっきり見えるので、コミュニケーションとしては密な状態になっているのではないかなというふうに思います。

我々が目指すものはですね、ちょっとこれ小さいですが、個々の個性を生かした力がちゃんと伝わる社会をつくというのが私たちの目指すもの、ビジョンとしています。そのために課題解決と価値創造するんですが、その土台になるのがシームレス&グラデーションというふうに位置づけています。いかにいろんな方々がシームレスにつながるか。それをつくることによって、課題解決と価値創造をしましょうということなんで、弱い人たちが集まってその人たちを支援する仕組みではありません。確かに一人一人は弱いんですけども、凸凹、つまりですね、凹凸をしっかりとかみ合わせることによって、決してチームとしては弱い存在ではなくて、しっかりと社会に価値を提供していくことができるようなチームというのを目指しています。

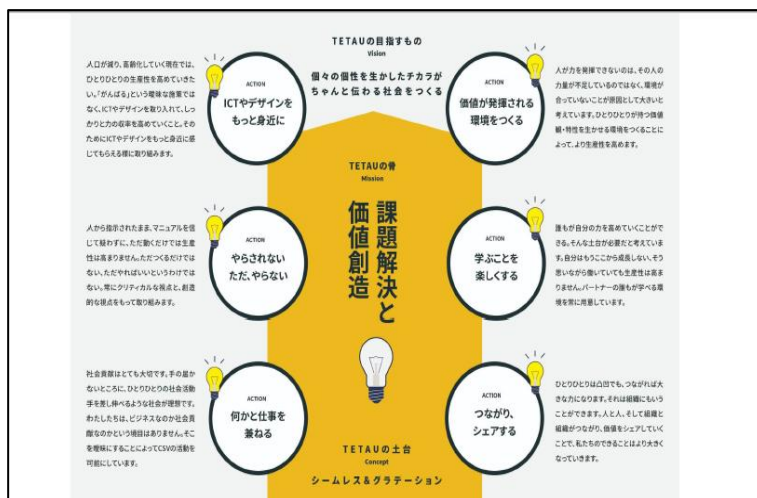
具体的に何をやっているのかって言いますと、まずテレワークというのは、三つの仕事ができるということなんですけども、一つは「考える」、そして「作る」、そして「動かす」という三つがあります。これがテレワークの業務の分類三つなんです。

どんなことをやっているか。「考える」っていうのはちょっと難しいですが業務効率化 ICT 導入支援とかですね。いろいろ書いてありますが、つまり企画をするということですね。我々がやっている業務ですと、例えば NPO さんの課題を解決するような支援であったり、企業さんもそうですね、例えば売上げを上げるとか、寄附を集めるみたいなことをどうやればそれが解決できるのかということ、我々が企画をして、実行していくというようなことをやっています。

表示しているのが、これはキッズパークさんですね。キッズパークさんの 20 周年のイベントを企画させていただいたんですけども、単にイベントをするっていうだけでなく、思いがちゃんと伝わる、イベントにするためにはどうしたらいいかっていう企画を行いまして、いろいろさせていただいたということなんですけど、ここは多種多様、様々な課題を扱っています。

そしてその企画が出来上がると次は「つくる」ということで、印刷物とかウェブサイトとか動画とかですね様々なものをつくるというチームがあります。このクリエイティブのチームは専門スキルを身につけて、印刷物やウェブ制作を行うということですね。我々テレワーク中心の組織ですので、受注も地域内にとどまりません。1 番大きい売上げは、東京からの売上げが 1 番大きいですね、あまりどこから受注するかということも関係ないんですけども、印刷物とかウェブサイトみたいなものとかですね、そういったものを制作するチームがあります。

もう一つが「動かす」ということなんですけど、これは例えばショッピングサイトを企画して、ショッピングサイトを立ち上げさせていただくみたいな仕事もあるんですけど、ショッピングサイトってつくったらそれで終わりじゃないんですよ。動かしていかないと売上げになっていかない。ただ、今地域の企業さんたちだと、立ち上げるところまで私たちみたいな外部の人間が制作するということまで出来ても、つくったところで社内にショッピングサイトを動かせる人間がいなくて、というような課題というのは結構あります。そういったときに、うちのチームが社内のリソースと同じように、そのショッピングサイトの運用を行うっていうのが動かす



ということなんですね。なので、割と単純な業務だけれども、そのICTを使った業務みたいなことをたくさん請け負ってきて、チームで分配したりすることがあります。イメージとして、今、現代の仕事っぽいことなんですが、AI のアノテーション業務というのがありまして、我々の身近になっている AI なんですが、実は AI っていうのは先に教える業務をしないと動かないんですね。

これ、見ていただいても分かりにくいと思いますが、この口を開けていて、歯を見せている動画なんですけどもこれは歯の治療中の動画なんですね。その動画に対してこれは歯です。これは唇です。これは医療器具ですみたいなことを、本当にこつこつと指定していく作業があります。こういうのを AI のアノテーションというふうに言うんですが、この業務は非常に膨大な量のデータをやっていかなきゃいけないので、1 人ではとてもじゃないけど出来ない。なので我々のような数十人・数百人集まっているところが受注してきて、みんなで分け合ってお仕事をするというような形です。

これはAIの発達に従って我々の仕事も出来てくるので、非常に最新のものに関わっているっていう感じがして、人気の高い仕事でもあります。こういったことをさせていただいています。

本当にいろんな多種多様なことをさせていただいているんですが、特徴としては、全員がノースキル・ノーキャリアからスタートしたということですね。「そんな人材この地域にいるんですか」っていうふうによく聞かれます。いないです。何でいないか、そういう会社がないからですね。

経験値を積むことが出来ないんです。今すぐ即戦力で採用できるような人材というのは地域にいないんですね。では、我々はどうしているかっていうとゼロから育てます。実は今、活動してくださっているコアなメンバーも、全員パソコンもそんな大して使えないし、デザインなんか1回もやったことない。動画の制作なんか1回もやったことない。そういうメンバー全員が学んでですね、そしてスタートしているというのが特徴です。

これも地域にカスタマイズしてきました。本当は私たちも、最初からできる人が集まったほうが幾らも楽なんですけども、しょうがないと。これはやるしかないということで、6年前から、人材の育成というの始めて、今ようやく私がいなくても、勝手に回るというふうな状態になったかなという時点です。

その基盤になっているのがTETA子屋という学びの場でして、基本的にオンラインで勉強していくというスタイルです。でもこれオンラインで勉強するっていうのが、一方的に情報を与えるようなスタイルの学びの場ではなくて、自立するということが非常に重要なことなので、独学推奨という、いかに独学をできるような人材にするかというのが私たちのテーマです。自己責任ですよっていうふうに手放しているわけではないんです。あなたが独学ができるように支援します、というスタイルでやっています。もちろん、なかなか難しい方もいらっしゃる。ただ、私の知る限り、途中でやめた方もたくさんいらっしゃいますが、粘って5年6年勉強していくと、だんだんできるようになるという方も非常に多いかなと思っています。

実際我々の売上げのほとんどですねノースキルでチャレンジした方々に支えられていることを考えれば、十分成長できるということは、実証できているのかなというふうに思います。

私たちにとって最初にお伝えした凸凹というところですね、この凸凹というのが、実は私たちにとって、資源であるというふうに考えています。平坦であることを私たちは望んでおりません。いかに凸凹なのか。

ただですね、この凸凹という言葉は非常に使いやすいというかですね、ありのままのあなたでいいんだよっていう意味で使われることが多いかなと思います。確かにありのままのあなたでいい、というのは私たちのキーワードでもあるんですけども、もうちょっとシビアな意味で使っています。

それは、あなたは自分の凸凹の形をちゃんと知っているのか。そしてそれを人に伝えることが出来ますか、ということを常に問い続けるということが、我々の使命ですね。

ですから、もちろんありのままのあなたの姿でいいんだけど、ただ自分自身がちゃんと自分の形を知っていて、それを相手に伝えることができるかというのが、最も私たちにとって大事な部分なんです。それをできるような人材を育てていくことが出来ないと、多分我々の事業は成り立たないということなんです。

実際、どんな人が参加しているのかっていうことなんですけども、現在 123 名のメンバーと一緒に活動してまして、田辺市と和歌山市が大体 30% ずつぐらい感じて、他は和歌山県中に散らばっているような感じになっています。

この 123 名の、私たちの TETAU。クリエイティブパートナーという制度に参加している目的なんですけど、40% は子育てや介護をしている。なので、フルタイムで働くことが難しいという方々ですね。それから社会復帰。たぶん、今日のテーマはここですね。ちょっと挫折してしまってしまったという方が、社会復帰するために、うちのチームに参加しているっていう方が 17%。

そして、スキルアップをして、今、お仕事しているけれども、もうちょっと給料の高いものに、とかですね、シニアの方がもう 1 回チャレンジしたいとかっていう方が 22%。生涯学習とか社会貢献をするためですっていう、ほとんどこれもシニアの方なんですけども、21% という感じですね。ほとんどが子育てとか介護という課題なんですけど、17% 社会復帰のために参加しているという方もいらっしゃるのが現状です。

この生きにくさを抱えた人たちって、うちは 100% 生き難さを抱えた人たちなんです。私も含めてですね。私も実は子供の頃から生き難さっていうのをずっと感じてきてまして、そして社会人になった後も常に生き難いって感じてきました。

今は凸凹が大きいんだということを理解していますが、生き難いというふうに感じていた当時はなぜか分からなかったんですね。なので、自分自身を責めることにしかなかった。私が駄目だからうまくいかないんだ、というふうに思っていましたけれども、今こうして自分が、凸凹が大きい人たちが集まればやれるチームをつくってみて思うのは、確かに凸凹なのは変わっていない。だけどやり方はあるよということですね。

なので、その弱い存在としての支援をするのではなくて、社会の中で個々の価値を発揮するような仕組みをつくっていくということが重要であると考えています。だけど言うのは簡単ですけどやるのはもう果てしなく大変という話ですね。今も苦勞の真っ最中っていう感じではありますが、どのようにしてそれが可能になるのかということですね。実はそれを可能にする働き方が自営型テレワーカーという働き方なんです。

もし我々が通常の会社と同じように採用して、優秀な人材だけでやっていこうというふうな考え方を持っていれば、そのスキルを持っていない人たちは足切りするしかないんです。なので、どんな人でも働ける状況をつくるというために、必要な仕組みとして我々はこの自営型テレワーカーというのを採用しています。つまり全員が個人事業主なんですけども、全員が個人事業主にすることで、学びの時間を確保して、そして働き続けることができるような状態にしている。個人事業主って聞くと非常にシビアになっちゃうって思うかもしれませんが、その辺りは後ほど御説明したいなと思います。

なぜこの自営型テレワーカーという働き方が生きにくい人たちにとっての働き方になるのかっていうことなんですけど、まずはこの自営型テレワーカーの説明をする前に、働くという定義をもう 1 回再提示させていただきたいというふうに思います。

我々ですね支援をしている関係で、「パソコンが得意な人がいるんですけどテレワーク出来ませんか」って言われるのは、もう年数十回では済まないぐらい言われます。物すごい数ですね。気持ちはすごい分かります。ですがこれ私たちがどのように聞こえているかっていうと、こんな感じで聞こえています。

「はさみが得意な子がいるんですけど、何か仕事が出来ませんか」って聞かれているような感じがするんですね。多分パソコンっていうのは万能なツールである。下手すると魔法みたいな感じで。持っていて、パソコンができればいろんなことができるんじゃないかっていうふうに思われると思うんですけども、はさみもいろんなことができるのと同じように、パソコンも

単なる道具でしかないんですね。

なので、パソコンが得意というだけでテレワークができるかどうかというのは判断することが出来ません。パソコンというものも何なのかっていうことも、知っていただかないといけないのかなと思います。

このパソコンを使って働くっていうことを今から定義していきたいなと思うんですが、まずは働くという方をちょっと提示させていただきます。これ、原始時代。当然このころの写真はありませんのでCGなんですけども、男性たちが多分槍みたいなもの持ってですね、何か話しているところでしょうか。

我々ですね、ここにいて、生き残っている人間っていうのはすごいことに何億年も何十億年もの間、1回も生命途切れてない方がここにいらっしゃるんですね、誰も1回も途切れていない。

すごいことだなと思います。すごいロマンチックだなと思いますけども、なので、20万年ぐらい前まで遡れば、当然こういう時代が皆様の御先祖様もあった。その当時ですね、動物と同じように暮らしていたんです。人間も。なので、家族とか群れとかっていう範囲で助け合ったりはしていたかもしれませんが、でも動物も同じだったんですね。それが変わった瞬間。非常に簡単です。

俺、狩り上手い。あいつ、服作るの上手い。交換したら、効率がいいじゃないかということへの気づきなんですね。非常にシンプルですけども動物はこれやりません。他人と交換するわけですから、群れとか家族の枠を超えて交換し合う、これが人間の最初の気づきです。これが仕事の始まりで社会の始まりだと私は考えています。

この交換ということ、つまり、得意なものの交換というのがそもそも仕事だったということなんですね。しかしながら我々は、何となく仕事っていうのはそういうんじゃないくて、サラリーマンになるみたいなことが仕事だっていうふうに思い込んでいるわけですね。

最近の価値観というのは、どこかに就職して誰かの指示を聞いて行動することが仕事であるというふうに思っている。つまり、仕事に自分を合わせに行くことが、仕事であるというふうに思っているところがあると思います。

ほぼ全員がこの価値観というのはどこかに多分、そうじゃないと思っていでもどこかにこういうことだと思っていると思います。ですから良い就職先に入ったら安泰だったんですね。就職出来ないとまずいというふうに思うわけですね。

何でこの価値観になったのかということなんですが、遡ること60年前ぐらいに、自営業者から雇用の方が初めて数が多くなります。たった60年しかたっていないんですねサラリーマンの方の数多くなってから。それまでは自営業者の方が多いわけです。なんだけど、この60年間の間で、我々は、働くということはいわゆるサラリーマンだというふうに思うようになりました。

今またちょっと自営業増えているんですけども、まだまだ雇用が多いわけですね。

この働くということはサラリーマンなんだっていうのがどうやって生まれたのか、もう少し遡っていきます。

人類誕生して先ほどの原始時代みたいな写真の頃からずっと何十万年もたって、18世紀から19世紀頃ですね、第一次産業革命が起こります。社会で習った遠い記憶がありますね。

蒸気機関の発明です。関係あるの私たちに？関係あるんですね。蒸気機関が発明されて出来たものっていうのは何なのかっていうことなんですが、出来たもの、工場なんです。工場が出来たことによって何が起きたか、それまでは家族とか地域とかそういう単位でみんな協力して仕事すればよかった状態だったのに、蒸気機関のような工業が生まれて、それによって何が出来たかっていうと工場が出来たわけですね。工場ができると何をしなきゃいけないか、みんなが一緒に集まって働くということが必要になったわけです。

そのために何が生まれたか。教育です。みんなが時計を読めなきゃいけない、みんなが文字を読めなきゃいけない、みんなが協調性を持たなきゃいけない、みんながルールを守

らなきゃいけない、そういう働き方が必要になったから、今の教育の基盤が生まれて、これは私の個人的な見解ですが、残念なことにこの頃から教育ってのはほとんど形を変えてないんですね。

なので、私たちは協調性があるね、ハキハキとしゃべれて、挨拶が出来てっていう人たちを育てなきゃいけないと思い込んでいるわけですね。もちろん、この時代の正解だったということです。

しかしながら第二次産業革命で石油ですね。そして第三次産業革命でインターネットが生まれます。実は今、第四次産業革命の真っ最中ですよ。AI とか IoT とかブロックチェーンとか。横文字ばかり聞いているだけ眠くなりそうですけども、第四次産業革命が今行われています。情報化社会ってよく言いましたよね。「これからは情報化社会やから」って言いました。

この間、中学生に「情報化社会って知っている」って聞いたら、知らないって言われました。ジェネレーションギャップやなと思ったんですけど、情報化社会っていうのは実はもう終わっているという話で Society4.0 です。

今どこに向かっているかっていうと Society5.0 人間中心の創造社会というのに向かっています。さらにそこが、第 5 次産業革命と予想されていて、余談なんですけど第 5 次は何かっていうと、ICT 技術とバイオテクノロジーの融合というふうに言われています。そういうふうに時代がどんどん変わっているわけですね。

そして産業革命っていうのは常に今も起こり続けているということなんですね。我々のこの考え方を大きく変えたのは、この第三次産業革命のインターネット、世紀最大の発明と言われるこのインターネットが何を起こしたか。

もともとみんなが集まって働かなきゃいけないような時代だったのが、インターネットによってばらばらでもよくなっちゃったんですね。集まる意味がなくなっちゃったんです。これがインターネットっていうことなんですね。じゃあ皆さん、インターネットって何やと思いますか。

小学生にインターネットって何って聞かれてなんて答えますか。

インターネット、何となあよく分かるような気がするけど答えられない。当てんといってくれ〜っていう顔をしていますね。大丈夫です、当てないです。

でもむちゃくちゃ簡単な答えなんです。実は、世界中のパソコンがつながっている状態のことをインターネットというふうに言います。皆さんもお持ちのスマートフォンもパソコンの一つですね。なので、スマートフォンもタブレットのパソコンもインターネットにつながさえすれば、実は全世界でつながっている状態なんですね。



世界中のパソコンがつながっていること

何となくインターネットって電波がつながっているのかなって、架空のものでしょって感じがするかもしれませんが、日本とアメリカがどうつながっているかっていうと、今のこの画像のとおり、海底ケーブルでつながっています。実際に線ひかれているんですねえ、すごくないですか人間。これ海底ケーブルの図なんですけど、人類これひいているんです、船で。ずーっとひいているんです。すごいことやなと思います。余談ですけども、本当に切れるらしいです。魚とかサメがかじって切れるらしいんですけど、ちゃんと直してはるそうです。

そして、インターネットはネットワークになっているので、切れても別のところからつながれるので、私たちは切れずに使うことができます。実はですねこういうふうにも実線につながっているつまりインターネットっていうのは本当に網目なんですね。これがインターネットです。日本を拡大してみるとこんな感じです。世界中とインターネットがつながるケーブルっ

ていうのが何本も出ている状態になっています。

これによって何が起るのかっていうことなんですが、パソコンとパソコンがつながるので、当然世界中の人とつながってやりとりすることができるようになります。なので、遠くに離れていても、写真とか動画なんかのデータを送ることができるようになります。

そして、パソコンって実は箱なんですね。相手の箱に時間に関係なく入れておくことができるので、時間も関係なく送ることができます。そして自分が発信したいこと、世界中のどこに私の話を聞いてくれる人がいるか分からないけれども、一旦自分の箱に入れて、それをインターネットで公開することができるっていうふうなものが、このパソコンとインターネットによって生まれています。

ということなのかっていうこと、ICT、インフォメーションアンドコミュニケーションテクノロジーというふうに言われますが、大事なのはこのコミュニケーションというのが入っているかないかですね。IT は入っていません。ICT はコミュニケーションが入っています。この ICT って聞くと、何となく新しいもんが便利になるとかそんなふうに思われることが多いんですが日から概念を改めていただきたいと思います。

ICT というのは出来ないことができるようになるんじゃないです。様々な現在抱えている制限から解放させるのが ICT なんです。それが ICT、そう思っていないと、便利なものだと思って使うと「意外と大変やん ICT って」ってなって、皆さんやめちゃうんですね。「難しいわ～」みたいな感じになって。違うんです。

新しい物が手に入るんじゃないんですね、今皆さんが抱えている制限から開放されるのが ICT。そう思えばですね、ちょっとやってみようかなっていう気持ちにもなれるんじゃないかなと思いますが、ICT というのは、パソコンとパソコンが世界中でつながったことによって様々な制限から開放します。例えば時間は当然ですね、それから場所もそうです。それ以外にも、例えば経済力、今までだったら何かを学ぶのに学校に行かなければならなかったけれども、今は超ローコスト、もしくはタダであらゆる情報が手に入る時代になって、つまり学校に行くという経済力なくてもいいとかですね、あとはお店を立ち上げるのに昔は 1000 万ためてみたいな話でしたけども、何ら今から私 5 分いただければ新しい店をインターネット上に立ち上げることはすぐ出来ます。つまり経済力から私たちは解放されているということなんです。

それから関係性も、このインターネットがなかった頃には、地域でつながるしか方法がなかったですね。ペンパルみたいなのもありましたけども、やっぱり会って話すには、この地域というものにとらわれていたわけですが、場所から解放されることによって人間関係の関係性からも解放されます。

うちのチームが和歌山県中に散らばっていて、この地域の人たちとやっていないっていうのと同じで、関係性というのは実は世界中でつくることができるということですね。

それから流通もそうですね。流通はですね、どこに発注すればいいか分からないような細かいニーズってあると思うんですね。今までは、例えばデザインを発注しようと思ったら、電話帳とかで調べて、ここのデザイン会社あるやんって言うて、そこしか選ぶことが出来なかったんですが、今は例えば熊野古道にめっちゃくちゃ詳しいデザイナーさんに作ってほしい、みたいな訳分からん細かいニーズもこのインターネットによって探し出すことが可能になっているということですね。

つまり今までは、デザイン会社に入るために学校に行って、みんなができることをみんなでできるようにならなきゃいけなかったんですけど、熊野古道にめっちゃくちゃ詳しいデザインができる人になれば、仕事ができる時代になっているっていうのが面白いと思います。

これはね Direct to Customer と言われて、シェアリングエコノミーとかって言われるものにもつながっています。

それから特性ですね。特性からも解放されます。私が教えている障害を持っている子どもたち、肢体不自由の子なんかは、手先しか動かないとか、もしくはペンで動かして、タブレットを操作するっていう子達ですが、もうみるみるうちに吸収して、ある男の子は支援学

校を卒業して、もう動画クリエイターとして活動し始めています。

それまではですね作業所に通うか、生活介護事業所に行くかみたいな選択肢しかなかった。

今も作業所に通っているんですけども、やっぱり生活しないといけないので。配慮してもらえそうな状況に置かなきゃいけないので行っていますけども、家に帰ってきてから、家族は仕事したり、いろいろ忙しそう。で、自分がやることはゲームしかなかったという状態から、動画の仕事をするようになって、彼はただ単純に仕事としてお金が入ってくるっていうだけじゃなくて、多分未来が相当明るくなったと思います。作業所が悪いわけではないんですけども、やっぱりそれしか自分の未来ってないのかなって思っている状態と、まだまだできることがあるかもしれないというふうに思っている状態では、やっぱり生きていく力っていうのが違うなって思います。

ですからその特性というもののからも、うまく使えば、開放されるということです。特に肢体不自由の障害をお持ちの方なんかには非常にはまりやすいものかなというふうに思います。

働き方の変化、第三次産業革命を経て働き方が変化した。つまりですね今までは工場で働くためにみんなが同じでなければならない。なので、正しい枠にはまりに行くのが今までの時代です。

今からの時代っていうのは逆ですね、自分がどういう形をしているのか、自分の価値って何なのかっていうことをちゃんと自分で知って、それをどう発信して、どうつながっていくのかっていうことが必要な時代に突入してきている。なんなら、課題の大きい人ほどこれが必要です。課題が小さい平均なんでもできるよっていう人は、多分この正しい枠みたいなものは、急になくならないと思うんですね。今までどおりつながっていくと思うんです。凸凹が大きかったり、課題が大きい人ほど自分の価値っていうのがどういう状態なのかっていうのを知っていかなきゃいけない。

つまり、私たち支援する側としても価値の在り方っていうのをアップデートしていかないと、こういうものが価値であるというふうに思い込んでいたら見えないという時代に突入しているっていうことかなと思います。

もし、テレワークが今後普及すれば、本当にいろんなことが可能になると思います。我々が考えている非生産性人口の労働化っていうのは、当然地域にとって非常に重要なんですけども、それだけじゃなくて、やっぱり地元を選択できる、地元に残れるとかですね。それから生き方の選択ができるってかというふうなことが言えます。

当然企業側もこれから本格化してくると思うんですが、労働人口が今足りていないので、自営型テレワーカーという人材に十分仕事回る時代がすぐそこまでやってくる。

今普通に雇おうと思っても人が来ないっていうのが現状なので、それを何らかの形で、どこかに発注しなきゃいけないっていうふうになっていますので、これから個人事業主っていうのは大きなマーケットを持っているというふうに思うんですけども、企業側の課題を解決できる、地域としてもですね、移住者の受入れがしやすくなったり、子育てしやすい地域が実現出来たりとかですね、いろんな可能性を秘めていると思います。

ちょっと余談ですけども、この中にサテライトオフィスの誘致って書いてあるんですが、皆さん白浜町にサテライトオフィスが四つあるのは御存じでしょうか。IT サテライトですね。

四つ目が、クラウドナインさんが白浜空港の目の前にでき上がって、四つあるわけで、この会社さんたちはみんな東京、ほぼ東京の会社なんですけども、地元雇用を積極的にやりたっておっしゃっているんですね。雇用を生み出してくれたらと知事もおっしゃっていました。しかし現状というのはどうなのかっていうことですね。雇用の枠は、どの企業さんも非常に大きく開いています。10人とか20人雇いたいというふうに企業さんみんな口をそろえておっしゃいます。ですが、実際採用しているのは2人とか。全然来ないっていうんですね。

ないというのは何かっていうと、求人を出しても、広告に意味がないって意味ではないんですね。もちろんITみたいなものが、ちょっとハードルが高くて応募出来ないみたいな意味

もあると思いますが、先ほど言った「働く」の価値観が、東京と地方でもずれてきているってことなんですね。

地方の人材は一生懸命、相手の言うことを聞かないといけないと思っているので、一生懸命やるんで、何でも言ってください、言ってくれたら何でもやるんでって言います。でも東京の企業は、あなたは何をやりたいんですかっていうふうに聞くんですね。びっくりしますね。あなた何やりたいんですかって聞かれるんです。すぐには答えられないんですよ考えなければ。だから採用されないんです。

そこには、私が見えているだけでも 100 人ぐらい雇用の場があるわけです。サテライトオフィスでも地域の人材、行けないんです。なぜかっていうと自分が何をやりたいかを知らないんですよ。スキルの方ではありません。スキルももちろんあるにこしたことはないんですけども、東京の人材が求めているのは、本人にやりたいことがある人材なんですね。そういうことを知るだけでも、育成とか支援の方法は変わってくるんじゃないかなと思います。

じゃあですね、テレワークって何なのかということですね。もう一度ちょっと見てみたいと思うんですが、我々が推進している自営型テレワークという働き方は、その名のとおり「自営型」というのは「個人事業主として」という意味です。で、テレワークの「テレ」はテレビとか telefon とかと同じなので、離れたところで仕事をするという意味ですね。別にパソコンを使ってっていうふうに定義されていません。離れたところで仕事をしていけば全部テレワークということになります。

この個人事業主として離れたところで仕事をする、この自営型テレワークというのはですね、一応税法上で個人事業主に分類されているんですが、厚生労働省が明確に個人事業主の中に自営型テレワークという働き方を位置づけています。なぜなのかっていう話なんですけども、実はその個人事業主の中でも自営型テレワークだけちょっと特殊だってことなんですね。

テレワーク、家で働こうと思ったら実は 3 種類あるんです。一つは雇用型テレワークですね。

そしてもう一つはフリーランス、そして間に自営型テレワークっていうのが存在します。

雇用型テレワークっていうのは何となくイメージが強いと思うんですけども、我々も別に推奨してないわけではないんですが、雇用型テレワークっていうのは、いわゆる就職活動をして、雇用される形なので、やっぱり学歴職歴スキル資格みたいなものがないとなかなか難しいというのが現状だと思います。そして、さらにそれにテレワークがくつつくので、テレワークで研修するってめちゃくちゃ難しいんですね。だから、かなり経験豊富で、テレワークでもすぐに「はい分かりました」って習得できる人だったら働けますけども、全部教えてくださいっていう態度の方が、テレワークで教えられるかって言ったら、これ無理です。なので必ず現地に行って、研修されないといけないんですけども、やっぱり雇う側としても即戦力が欲しいってなると、中途採用とかかなり難しいです。なので、雇用型テレワークっていうのは、すごく限られている、狭き門なんですね。

今はですね、ほとんどのケースで、就職して雇ってる人たちが、出産で「じゃあテレワークしていいよ」とかですね、今も雇っている人をテレワークにするっていうのがほとんどということになっています。

和歌山県内で雇用型テレワークを採用している企業というのは非常に少ないんですね。まだまだ東京のものだなと思いますけども、東京も 1 回コロナでテレワーク普及したんですけども、またちょっと戻ってきています。なので実はですねまだまだ、まだ先ですね。これが普及するのは、かなりかかるというふうに思います。今増えてきているのは、障害者雇用枠として雇用型テレワークで働くというのは増えてきているんですね。

ただそういう場合もですね、大体がエンジニアとかプログラミングができるみたいな、そんな専門的なスキルを持った人に限定しているようなケースが多いかなというふうに思います。なので、非常に魅力的なんですけども狭き門なんですね。

一方でフリーランス、個人事業主はどうかっていうと、これは皆さん御存じのとおり、起業

ですから、フリーランスです。私もフリーランスなので分かりますけども、仕事を取ってくる。つまり集客したり営業したりするところから、そして、当然納品して会計するところまで、それをずっと上手に続けていくってことです。非常にマルチタスクなんですね。いろんなことができるようにならないと、フリーランスとして成立しないって意味では非常にハードル高いですね。

そこで注目されるのがこの自営型テレワークということなんですが、雇用型テレワークは従属労働というふうに言われます。つまり何かに従属して働く。フリーランスは独立労働ですね。何にも従属しないで自由に働く。自営型テレワークは準従属準独立労働というふうに言われます。

つまり、ある程度独立して、ある程度従属して働く働き方ってということなんですね。何に従属するのかっていうのはいろいろあるんです。なので、一概にこれに従属して働くっていうんじゃないくて、企業に従属する形もあれば、ウェブサービスに従属するとか、我々のようなチームに従属するとかっていう形があります。

従属することでフリーランスのように全部出来なくても、仕事をするのがこの自営型テレワークという働き方ということです。テレワークの仕事ってのは何があるんですかってよく聞かれるんですけども、大きく分けると「考える」「つくる」「動かす」の3種類です。残念ながらですね、これっていう仕事って幅広すぎて、いろいろあるんですけどもなかなかこういう講演の場で、明確にお伝えするのは難しいんですけども、本当にいろんなパソコンを使った業務は全てがテレワークの対象になっていきます。

ただ、特徴として、同じ作業を繰り返す仕事はありません。残念ながらパソコンっていうのは同じ作業の繰り返しめっちゃくちゃ得意なんです。パソコンに勝てる人間はいないです。なので、例えばこっちのデータをこっちに移すだけとかですね、そういうような業務は昔はありました。手書きのものをこっちに移して、打ち込んでいくだけの仕事。

今はないんです。残念ながら全部自動化してしまって、単純な業務っていうのはどんどん減っている。これからどんどんその AI の発達によってさらに少なくなっていく傾向にあるというふうに思います。ですから、同じ作業を繰り返す仕事がいいっていう場合はですね、テレワークはあまり向いていないということになります。

ただ、これは全く同じ作業はないってだけでですね、工夫すればいろんな作業をすることができる。先ほど言いましたように、従属するわけですから、1人でやらないんで、それをチームで分担することによって、可能になるような働き方もあります。

ですから、うちには課題が大きい人たちも働きに来ていますので、課題の大きい人の周りの人もですね、その人にできることっていうのをちゃんと見つけて、そしてチームとして動いていくっていうふうになっているんですけども、なのでここは「ないならあかんわ」っていうふうに思うというよりは、工夫の余地はあるよねっていう話になるかなと思います。

これまでの時代は、テレワークってどういう仕事がありますかというふうに、まあ、今もよく聞かれます。どんな仕事あるんですかねって。これ、一言で答えるのはめちゃくちゃ難しいなっていう話なんですけども、逆ですね、それは仕事に人を合わせる時代だからです。仕事に自分を合わせにいく時代やから「どういう仕事がありますか」って。

今からは、人に仕事を合わせていく時代なので、「どんな特技とか個性を持っていますか」というふうな疑問になります。そしてこの特性とか個性がどんなものなのかっていうのを「見極める目」というのが支援者に非常に重要になります。どんな仕事がこの人に合うのか、そういうことを考えるのには、この特性・個性というのも血眼になって見るしかないというのが現状かなと思います。

ではこのフレックスワーク、私たちは家で働くということを「フレックスワーク」というふうに呼んでいます。柔軟な働き方なので。テレワークってただ離れているだけなんですね。なので、私たちはフレックスワークっていうふうに呼んでいるんですが、このフレックスワークっていうのを選択するために、皆さんにも共有しておきたい課題というのをお話したいと思います。

このフレックスワークっていうのは、フレックスなんです。なので、例えばこの仕事ができるようになれば、あなたは仕事できるようになりますよっていうことが難しいですね。当然、最初は仮の仕事とかをやってもらって、それでスキルを上げていくんですけども、なかなか決まった仕事が永久にあるってことがないんですね。

なので、何が必要になるかっていうと、我々が重要視しているのはコーディネーター。私たちはコーディネーターと呼んでいるんですけども、このコーディネーターという存在がもう絶対に欠かせないということになります。要は仕事とその人をつなぐ役割がいるよっていうことなんですね。このコーディネーターが知識と経験を持って、当人と学びとか仕事をつなげていかないことには、本人の自立に任せて選びなさいっていうのでは、現状ちょっと難しいかなと思っています。つまり支援する側が、ちゃんとテレワークとかに対しての知識を持つということが非常に重要なのかなと思っています。

実際ですね我々のところにも、月に何件かですね、こういう方がいるんですけど何かできることないでしょうかということで相談が来るんですけども、いつも思うのは、こういう方がいるんです、って言うてつないでもらったら終わりっていう方が多いんですね。パソコンとかインターネットって万能じゃないよって話を先ほどしましたけども、ただ単に制限がなくなるだけなので、その方を目の前にこれが出来ますよねっていう話ではないんですね。

そうすると、我々の事業協同組合だけで、その人を支援するというかなり難しい状況です。その方の特性とか、どういうものが好きでとかどういうものが嫌いとか、どういう環境に今置かれていてっていうことを我々が把握しようすると、支援がメインじゃないので、働くことがメインなので、どうしてもそこまで行き届かないんですね。

なので、支援してくださっている方とつながっていくためには、支援の手をですねこっちに丸投げするんじゃなくて、ずっとつないだままでいていただきたいというのが本音のところなんですね。

なので、我々は、皆さんにこういうふうに知っていただく機会も非常に貴重だと思っていますし、今後もただ単にこの話だけで終わらずに、支援を一緒にやっていけたらいいんじゃないかというふうに思っているんです。

そのとき、我々がコーディネーターに伝えている一部ですけども、ちょっとお話ししたいなというふうに思います。

皆さんが支援している方々がテレワークさせたらいいんじゃないかなって思ったときに、何を授けないといけないかっていうとですね、四つの力があります。

ICT、これは何となくイメージつくと思うんで、パソコン使う力みたいなイメージがあると思うんですけども、残念ながら「C」が入りますので、コミュニケーションが入ります。IT じゃなくて、ICT なんですね。

なので、必ずやりとりの部分が入ってくるので、ここの部分が、例えばゲームをずっとやってる子がいて、パソコンの使う操作技術が優れているっていう状態はあっても、他人とやりとりするところはちょっと苦手ですっていう方が多かったですね。

なので、ICT と言ってもですね単にパソコンを使う技術じゃなくって、ICT というのは例えば、相手にどうやったら伝わるかみたいなコミュニケーションの部分が非常に重要なんですね。CM なんかでも、これからはデジタルのコミュニケーションだとか言っていますけども、そういうものですね。デジタルのコミュニケーションっていうのが含まれた ICT の技術が必要となります。

もう一つがビジネスですね。言っても仕事ですので、例えばやりとりをしたときに、失礼な事を言っちゃうってほとんどないですよ。どっちかっていうと、今、課題を抱えていてまだ働いた経験が少ない人っていうのは、これを相手に言っているのか、言って駄目なのかみたいなのが、判断がつかないんです。それで困っちゃうっていう傾向があります。

失敗は少ないですね。極端に失敗を恐れるので。あんまりガンガン行動しないので、やっぱり、迷うというところが大きいですね。そのときにはビジネスっていうのが何なのかっていうことを改めて整理し直してあげて、そして、相手に対して、何を自分は提供したらいいのか

っていうことを、一から教えていく必要があるんですが、それを主体としてビジネスのこと、マナーとかルールみたいなものを、勉強していく必要があるんです。ここには見積り書を作るとかですね、請求書を作るとか、エクセルが使えるみたいなことも入ってくるかなと思います。

そしてもう一つはメタ認知ですね。先ほどから言っている自分の凸凹を自分が知っているかという状態です。ここを鍛えていくということと、そしてコミュニケーションということです。テレワークやからコミュニケーションないのを期待していたのに、っていう方いっぱいいます。で、最初はみんながっかりするんです。テレワークってコミュニケーションめっちゃ必要じゃないですか。テレワークに限らず仕事はほとんど多分そうなんですよね残念ながら。

私はそういうふうと言えた人、コミュニケーションが私苦手なんです、テレワークやったらコミュニケーション要らんとってきただのっていうふうに、私に伝えることが出来た人には、徹底してこのコミュニケーションっていうことを改めて教えます。そうすると何が起るかっていうと、今までのコミュニケーションのイメージがガラッと変わるので、できるようになるんです。

ちょっと後ほどお話ししたいなと思うんですが、この四つ、ICT・ビジネス・メタ認知・コミュニケーションの四つ教えないといけないんですけども、このうち、ICT とビジネスは必ず身につきます。カスタマイズする必要はありますけれども、その方の特性に合わせたやり方をちゃんと考えれば、最低限仕事に必要なものっていうのをやっていけば身につきます。

難しいのはこの下二つ(メタ認知・コミュニケーション)ですね、これがものすごい時間がかかります。

この自営型テレワーカーという働き方っていうのは非常に自由だし、一部従属できるので、とても柔軟な働き方なんですけど、何が必要なのかっていうと私たちは自重力というふうに呼んでいます。自分で整える力ですね。自立せえじゃないんです。自分で整えなさいということです。

例えば自分の御機嫌を自分でとれるかってことですね。

テレワークっていうのは側に人がいないんで、一緒に働いていたら、怒っていても「どうしたん？大丈夫？」「あの人ひどいなあ」とか言いながら解消していけるんですけど、テレワークって基本 1 人です。なので、怒っていても誰も気づいてくれへんし、そうすると自分でこの怒りをどうにかコントロールすること、落ち着くことができるような力とかが必要になったりとかですね、あとは「怖い」みたいなのもそうですね、これ送っていいんかな大丈夫かなみたいな、怖いからそれが送信出来ずにいるみたいなときに、自分でそれを「これ送ってもええんや」というふうに思えるように持っていけないといけないので、これが多分 1 番難しい力なんです。

だから、私たちはこれしか言っていないです。ICT とビジネスはそのうち身に付くって思っています。ですが、この自重力は、その人に問いかけていかないと全然身に付かないですね。特に必要なメタ認知とコミュニケーションつまり自分の形を知るという事と、人とやりとりする。

これ何で重要なのかっていうと、ビジネスとか ICT はほかの人が代替することができるんです。その人がそれが出来なくても他の人がやってあげたらいいんです。

ただメタ認知とコミュニケーションだけは他の人が代替することが出来ないんです。だってそれが嫌だと感じているのか、良いと感じているのか、それを他の人が感じ取るっていうのは、100%は出来ないんで、なのでこれが特に必要になってきます。

簡単に言うとうこうですね、「自分の凸凹を申し伝える」ことです。現在まだですね、凸凹をなくすようにする。というようなことの方が多く行われているんじゃないかなと思います。

我々が実際に支援学校とか行って授業をおこなっているんですが、先生と生徒さんで目標を立てますみたいなことやっていてですね、「どんな目標を立てたん」っていうふうに聞いたら、僕はすぐに返事が出来ないんで、すぐに返事をできるようになりたいですって言ったんですね。そのときに聞きました。何ですぐ返事すんのって、ほんまにすぐに返事するのが

必要なんかって聞いたんですね。

そしたら先生もその子も、「う～ん」って考え始めて。「相手が困っているかもしれんし…」。ほんまに困ってんの？って聞いたんですね。怒ってくんの？怒ってくるんやったら、その人と付き合わんくてもええんちゃう、とかっていうふうに問いかけを続けていったんですね、そしたら「はあ、そうか僕別にすぐに答えんでもええんか」ってなって、でもそれやといろんなことに支障があるかもしれへんな。じゃどうするんやと言ったら、会った時に「僕はすぐに答えるのが苦手なのでお時間いただくかもしれませんが」っていうことを、会った瞬間に伝えられるように考えたらええんちゃうかっていう話になって。その子は自己紹介の資料を自分でつくって、そこにしっかり書いてありました。「すぐに答えるのが苦手です。なので時間もらいます」っていうふうに書いたんですね。

会う度に自己紹介シートを使って自己紹介するようになって、大人になったら名刺に書いたらええなあみtain話していたんですけど、面白いことにですね、それを書き始めた瞬間から、すぐに答えられるようになったんですね。

つまり、何でその子が答えられなかったのかっていうのは、すぐに答えられなかったんじゃないんですね。多分、すぐに正確な答えを出さないといけないというふうに思い込んでいただけだったんですね。

そうやって私たちとやりとりを続けて、だんだん何言ってもええやんみたいなふうになってきて、まあ何を言ってもいいわけではないんですけども、自分が言ったことがちゃんと聞いてもらえるんやというふうに思ったら、どんどんどんどん意見を言えるようになってきた。意見を言うと当然、他の意見が飛んできますよね。だから最初のうちは「そなん言われるんや」みたいな感じでびっくりしていましたが、これは面白いことに意見が言えるようになると意見が成熟してくるんですね。そして、その子は非常にすばらしいことに、高校2年生ですけども、大人顔負けにいろんなことを自分で考えるようになりました。

もちろん知的能力が高いということもあるのかもしれないんですが、多分その現象が起こらなかったら、この子はすぐに返事が出来ない子なんですというレッテルを張られたままやったんちゃうかなと思います。

決して凹凸をなくすことではなくて、自分の凹凸を本人が認めていくということですね。そして周りもそれを理解していくっていうのがすごく重要だと思います。当然そんなことは皆さんも重々御存じで、私なんかがいうようなことじゃないかもしれませんが、実はテレワークにもすごく重要だということを知っていただきたいなと思っています。

凹んでいる部分があったら、出ている人に手伝ってもらえばいいんですね。むしろ凹んでいる部分を出ています。私出しています、できるんですって言うてたら何が起こるかって言ったら、周りの人間は、もうそっとしておくしかないんですね。凹んでるやんって思うけど、本人が出てます出てますって言ったら、はまりに行けないですね。助けに行けないので、なので、凹凸っていうのは、一生埋まらないんです。でも、自分がここ凹んでるんですって言った瞬間に、「はいはいはい」って埋めに行くんですね。うちのチームでは実際そんなことは、日常茶飯事なわけです。

だから面白いことに、仕事としてふりますよね。例えば取材に行かなあかんみたいな仕事があって、ちょっと地域の宿泊業の方に取材に行くねんってなったときに、1 人の人にふられました。そしたら、その人がアポイントをとるのがすごい嫌だっていう話になって、「アポイント嫌なんです」って言い始めるんです。みんなにね。「じゃあ私やろか」っていう人が生まれてきて、「ほんなら私やりますわ」ってなって。ほんで、「私、1 人で書き上げる自信がないから誰か見て欲しいんや」ってなったら「ほんなら、私そこ見よか」ってなって、自然にそこでチームが出来上がるんですね。指示してないんです。

もう勝手に出来上がるんです。私がやっているのは、何人でやってもええって言うっているだけなんです。何人でやってもええっていうふうな環境をつくり出すだけで、勝手にチームをつくり始めて、そして補っていくっていうことが生まれてきます。そのためにはやっぱりお互いの凹凸を知ってないと、しゃしゃり出ていくって難しいですね。できると思っているところ

に「できへんのちゃう。やってあげよか。」なんて言ったら人間関係壊れるので、やっぱ出来ない、できるっていうのをしっかり見ていくっていうのが重要かなと思います。

そのために支援者ができることとして、私たち TETAU がやっていることなんですけども、まずですね自分の形を知る。特にですね、世界と断絶しているように見える一つにはですね、自分の形って、自分を見ても分からないんですよ。例えば私が世界で1人しかなくて、私って太っているの？ 痩せているの？ ってないですよ。1人しかいなかったら。太っているとか痩せているとか、美人とかそうじゃないとか、そういうのはあくまでも相対的なものなんです。だから、他人がいて初めて自分の形が分かるということなんです。

つまり、自分自身が「あなた何がやりたいの？」って問いかけても絶対に答えは出てこないってことなんです。そういう方には何をしなきゃいけないかっていうと、世界を拡張させないといけないんです。なので私はですね、例えば、社会にちょっと挫折して、ほんでうちに来た子なんかはですね、しばらく仕事せんでもええやろ、お金にならんくてもええ、みたいなことを聞いてですね、お母さんにも言うとして、お金にならんからしばらくって言って、何をしているかっていうと、連れ回します。例えば、「県庁一緒に行こうか」とか、「県庁中入ったことある」とか、東京の企業さんと打ち合わせがあるから一緒にちょっと行こうか、みたいな感じで、一緒に連れ回しているんですね。

連れ回していると、自分の世界の中では自分は駄目なんやと思っていたんですけども、世界拡張して行って、どんどんいろんな人に会っていくと、「あれ、何か違う感覚になってきた」というふうになってきます。当然、連れ回すためには、そこ行ってもいいよっていう子じゃないと行けないので、そこが限られてくる難しいところではあるんですけども、例えば出れない子だと、オンラインで話をしたりとかですね、そういうことから始めて、世界を拡張していきます。

拡張していった上で、やっぱりその子が自分の得意なことに気づけるような環境をつくっていくってことですね。環境をつくってあげると、自然と他の人と比べて、私はここが価値なんかもしれないというふうに、面白いことに思い始める。これはですね、若い子ほど顕著に自分でちゃんと感じ始めます。

我々のとこ40代がメイン層で、40代が1番多いんですけども、40代以上はものすごい時間がかかります。もう何年もかかるんですね。でも子供たちっていうのはすごい、子供とか若い子はやっぱり早いなというふうに思いますので、我々も「若い子はえこひいき」というキャッチフレーズなんですけど、若い子はどんどんえこひいきしていこうと思っていまして、その環境づくりをしてあげるということをやっています。

それからですね、もう一つはコミュニケーションの概念をアップデートするっていうことですね。この二つがめちゃめちゃ重要なんですけど、最後ちょっとこの話をさせていただこうと思います。

一つ、メタ認知ですね、この自分の形を知るっていうところは先ほど言ったみたいに連れ回すんですけども、凹凸を理解するっていうところ。でも、あなたのままでいいんだよ、分かった分かったっていうだけでは何もならない。実際に生活していけない、お金を得ていけないんで、フィードバックが絶対大事だと思っています。

このフィードバックがめちゃくちゃ難しいので、浅井先生に授業も 毎月毎月していただいて、どうやってやるのかっていうことも勉強しつつなんですけども、今私の中でですね、こうだなと思ってることっていうのは、やっぱりその子の興味関心を理解することからスタートしないと何もスタートしない。

うちにも引きこもりぎみな子さんが来るんですけども、仕事の話なんかしても「はい、はい」って返事してるのかしてないのか分からない感じなんですけど、その子の興味があるところに火がつけば、急に話出したりとか、表情が変わってきたりしますね。そのときに、やっぱそこを理解する。支援学校だったり NPO さんだったり、いろんな関わりがあるときにちょっと思っているのは、「そうなんや、私全然分からへんねん」という人が多いんですね。

それではちょっと広げてあげられへんなと思うので、ぜひ皆様もユーチューブとか見てい

ただきたいと思うんですよね。それ、ものすごいきっかけなんですよ。

例えばうちやったら、イラストが好きとかっていう子が多いんですね。自分でイラストを書いている、と。イラストが、何かのキャラクターでしかなくて、「こんなの仕事なりませんよね」って周りの大人たち言っているんですよ。そこじゃないんです、ってことなんです。まずイラストを書くことが好き。そのイラストを描く中でも何が好きなんか。真似して書くのが好きなんか、書き心地みたいなことが好きなんか、それとも自分の色をつけるっていうところが好きなんか、みたいなとこをむちゃくちゃ見ます。どの行為がその子が1番好きと思ってるのか、っていうのをじーっと見ているとですね、何となくこういう仕事なんちゃうかなっていうのが見えてくるんですね。その知識があれば、マッチングさせることが出来ますが、この知識がないと、上手やな、何かイラストの仕事出来たらいいなあ…終了ですね。そこは難しいと思います。当然専門家じゃないと分かんないと思うんですけど、これが多分皆様と私たちが組めば最強タッグだと思うんです。『こういうところが好きそうなんやけど』みたいなことを見つけてくれたらですね、『ほんならこういう仕事あるんですけど』みたいな話ができると思うんです。

なので、この世界を広げるという部分でですね、どうにか私たちのような民間企業と支援者の方々が手を組むことが出来ないかと思っています。

それともう一つ大事なことは、一方的に勉強したらいいっていうわけじゃなくて、やっぱり、どう思った？楽しかった？楽しくなかった？嫌やった？って聞くんですね。すごい答えやすい質問で聞きますが、じゃあどうする？続ける？それともやめる？みたいなことをずっと聞いていきます。考えることをやめている子が多いので、最初はすごく戸惑うんですけど、慣れてくるとですね、当たり前のように聞かれると分かっているんで、最初から考えながら何かやるようになるんです。

そうすると、だんだんその子の特性っていうのが表に出てくるなって思っています。実際には口で言うほど簡単ではないことは私もある程度理解しているつもりで、難しいことではあるんですけども、やるしかないというふうに思っています。

私たちは別にひきこもっている子とかですね課題が大きい人だけをやってるわけじゃないんですね。普通の人を普段はやってるんですけど、普通って何なのか難しいですが、大きな課題がないと思われ人ですね。大きな課題がないと思われ人でも、これをやるのに二、三年かかります。

言えないんです。最初自分が何が出来ないとかですね、分からないんです。自分でも。課題が大きい人では5年から10年かかるという感覚です。ですので、できるだけ若い頃から、こういうことを進めていって自分の形を知ることが重要だというふうに考えています。

もう一つですね、コミュニケーションが苦手っていう人への対応の話なんですけど、これは私は三つの段階に分けていまして、まずはコミュニケーションが出来ない、苦手だということを私もその方も一緒に認知する。あなたはコミュニケーションが苦手なんやねっていうふうなことを認知します。その後で、コミュニケーションの定義を共有します。ここが大体間違っていることが多いんですね。

なので、コミュニケーションの定義を共有して、そのあとその人のコミュニケーションの形

凹凸を理解し、フィードバックする

その人の興味・関心を理解し、そこから世界を広げていく

一方的に与えられる環境ではなく、

- ・どう思ったか？
- ・自分ならどうするか？
- ・なぜなのか？

を常に聞いていく

特に大きな課題がないと思われ人でも2〜3年はかかる。課題がある人は5〜10年。

→できるだけ若い頃からメタ認知を進めておく必要性

をつくっていくという段階に入っていきます。

このコミュニケーションの定義、あくまでも我々がやることで皆様のほうが専門家なのかなと思うので、なかなか私がここで話するのもおかしいですけども、コミュニケーションの定義、我々はこういうふうに考えていまして、自分の視覚・感情・思考の共有ですよということですね。でも苦手な人はちょっと感覚が違うんです。対人関係みたいなふうに捉えているんです。他人に軸を置きすぎているんですね。

そうじゃない。コミュニケーションというのは、相手のことは、一旦ええねん。自分の感じたこと感情・思考を共有することがコミュニケーションであるということを再定義すると、あっそれでええんやっとなるんです、一回。出したものに対して相手がどういう反応するかってことなんで、そこはまた別の問題だよ。で、そこはフィードバックしていけばそういうふうな言い方したらちょっと嫌って思う人もいるかもしれへんねとか、そういうことを教えていくとだんだん分かっていくんですけども、まずは自分のものを外に出すことなんだよっていうことを共有しています。

それから、コミュニケーションというのは言語だけじゃないっていうことも。言語と非言語があるよ。だから、言語が得意じゃないんやったら、非言語の部分をうまく使おうっていうふうに言っています。うちのルールの中にこの非言語っていうのがすごいあるんですけど、みんな最初の頃って、上手に言わなあかんと思うんです。うちのチームに入ってきたら。特に私なんか聞くと、ちょっと緊張してですね、森脇さんに聞かれたら上手にしゃべらなあかんって思うらしいですね。

私はそこで言うんですね。上手にしゃべれへんのに上手にしゃべっても上手な人には勝たれへん。じゃあ、上手な人に伝えるにはどうしたらいいか、教えてあげよう。「何となく嫌なんですよ」って言って教えています。何となく嫌なんですよとか、何か違和感あるんですよってだけ言いなさい。それは何でかっていうと、私は脳の拡張機能っていうんですけど、他人の脳を使うっていうことを言ってるんですね。何となく違和感あるんですよって言われると言われた方としたらむっとする人もあるんですけども、言われた方は何でなんやろうって考え始める。本人は分からへんけど、この言われた側が考え始める。「こうだからちゃう」とか「こうなんちゃう」とかって言って、「ちょっと違うかな」とか「何かそっちかも」とか言ってたら、答えにたどり着くんちゃうかっていうこと。

つまりコミュニケーションっていうのは、うまく言うとか早く言うとかはっきりと言うとかだけではない。できるにこしたことはないの、できる人はやったほうがいいんですけども、これが出来ないという状況の人が、これを「できる」にかけるとエネルギー量が大き過ぎるんです。本来はここじゃなくて、もっとその子が伸びるようなところ、その人が輝けるようなところにエネルギーをつぎ込むべきなのに、100%ここに持っていけたら、もうコミュニケーション何とかうまくやることだけしか頭になくなってってしまうんですね。その子はうまく話せなくてもいいっていうふうにすると、初めてそこに向けたエネルギーを、例えば資料を作ったりとか、動画を作ったりみたいなのにかけるようになります。

なので、まずは「うまく早くはっきり喋らなあかん」ということを1回取り除くんですね。そうすると、さっき言ったみたいに急にしゃべり始めたりするのは面白いなと思っているんですけども、これは他人軸を考え過ぎて自分軸で考える癖がないんです。他人の反応に、過敏に反応してしまうという状況になっているので、そのところをうまく代替して言語化してあげる、何となくでいいから「何となく嫌な感じがするんですよ」とか、「何となくいいと思います」って言えばというふうに教えてあげると、そこをきっかけとしてどんどん自分でできるなったりするかなと思います。

あともう一つ大事にしてるのが、コミュニケーションのどの部分が苦手なのかっていうことですね。ただ単純に、コミュニケーションが苦手っていうのはちょっと雑過ぎるかなと思います。目の前に人がいるのが苦手なのか、それは全ての人なのか、特定の人なのか、大人数の人が苦手なのか、それとも小人数のほうが苦手なのかとかですね。あとは自分とタイプが大きく異なる人が苦手とか、自分とタイプが同じ人が苦手とかですね。何かを言われる

と思ってちょっとトラウマになっているだけなのか、そもそも言語理解自体が苦手なのかとかですね。そういったことをちゃんと分析してあげないと、コミュニケーション苦手なんですっていうのは、雑過ぎて指導する方法がないんです。

ということが苦手かっていうことが分ければ、ICTっていうのは幅広いコミュニケーションが可能なんです。対人関係っていうのはもう言語しか、発語しかないんで、非常に難しいわけですね。

でも ICT っていうのは、言語のコミュニケーションとしてはもちろん会話もできるんですけども、テキストとか動画も使えるんですね。だから、目の前に人がいたらしゃべれなくても、カメラ相手だったらしゃべれるんやったら動画で伝えることもできるし、文章で伝えることもできます。そして言語コミュニケーションだけじゃなくて非英語のコミュニケーションですね、身振り手振りだけとか、うちで顔を出すことが苦手な子はアバターっていうので参加していますけど、アバターになると急に動きが活発になる子がいます。それから服装みたいなものもありますし、あとは

、アートとかのアウトプットですね。伝えることが言語では難しいけれども、あなたの気分どんな感じなんって言ったら、イラストで表現できるとか、線で表現できるとか、そういうような非言語のコミュニケーションをICTってのはすごく使いやすいんです。

ICT は、当然言語のコミュニケーション得意なんですけども、ノンバーバル、非言語の部分のコミュニケーションがめちゃくちゃ得意なツールなので、そこは皆様に知っていただきたい。

いろんな方法があるよっていうことですね。目の前に対人関係があるときに、そこでうまくしゃべらなきゃいけないっていうコミュニケーションは旧来のものである。それが出来ないのであれば、いろんな代替するような方法があるよということを、皆様に知っていただきたいなというふうに思います。

まだ、多少違和感はあるかもしれないですけどね。何か急に動画が送られてきたと思ったらちょっとびっくりするみたいなのとありますが、若い子たちは今、動画でメッセージを送ったりしているんですよ。なので、若い人たちの方が慣れているとおもいます。私たちはちょっとぎょっとしますけどね。電話かかってくるんじゃなくて動画送られてきたと思ったらね。も多分これは時代とともに、みんな慣れていくと思います。

だから ICT っていうのは何となく難しいイメージがあると思いますが、実はどんな人にもかなり優しいツールであるということなんです。正しく理

解すれば、いろんな人にとって非常に有用なツールになり得るというふうに理解していただけるとうれしいなと思います。

で、最終的にその子にとってのコミュニケーション方法を最適化していきます。例えばスピードとか瞬発性、さっき言ったみたいにすぐに答えられないですっていう子は、すぐに伝える必要があるかなっていうのを一緒に話し合っ、ないっていうのであれば、名刺に書いてみようかとかっていうふうに伝えてみるとかですね、あとは得意な手段が何なのかっていうのを一緒に考えたり、苦手なものがあらかじめ分かっていたら特性を伝える工夫をする。例えば、会う前にメールを送れるような関係性なんであれば、メールで一言伝えておくということですね。「ぶっつけ本番やったら緊張するやろう。前もって言うとき」っていうふうに言ったりとか、あとはもう一つ、ちょっとシビアな話ですが、付き合う相手を選ぶ。インターネ

コミュニケーションの方法を最適化する

- スピード・瞬発性→本当にすぐ伝える必要があるか？
- 自分が得意な手段を知る→テキスト？会話？
- 「苦手」を伝える方法→あらかじめ特性を伝える工夫
- 付き合う相手を選ぶ→自分も選ぶ権利を持っている
- 相手を受け入れる→多様な価値観を理解する

ットっていうのは関係性から解放されますので、例えば自分がいろんなことをしても受入れてくれへんというような相手やったら、自分も選ぶ権利があるんですよっていうことを伝えていきます。

もう1個大事なのは、相手を受け入れるようにならないと駄目。自分の価値観を相手に受入れてもらうためには、自分も相手の価値観を受け入れるようにならへんかったら、自分の価値観だけ受け入れて、相手のことは受け入れられんっていうのはおかしいよねって。なので、いろんな人がおるよねっていうことを受入れていきましょうっていうことです。受け入れて理解する、そういう人おんねんなあというふうに理解していこうということです。

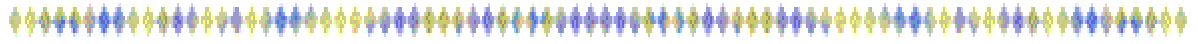
こうやって最適化してあげると、意外とコミュニケーション苦手やっていた子が、ある程度円滑にコミュニケーションとれるようになっていくということを、実際この6年間で見てきて、これをねさらによくしていきたいと思っています。

我々が目指しているところっていうのは、この成長する喜びっていうのを皆さんに感じていただいて、最終的にはこの紀南地域から、フレックスワークっていうのを発信したい。ダイバーシティの熊野ですから、ここから発信するっていうのは非常に面白いことだと思っています。

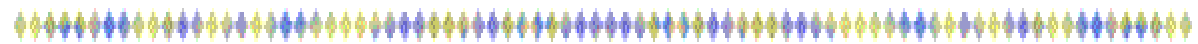
そのためには、我々TETAUだけでは絶対になし得ないと思っていますので、ぜひ地域の皆様と一緒に柔軟な働き方をこの地域から発信して、最終的には新しい産業が出来ちゃうぐらい。フレックスワークという産業がこの地域に出来ていて、この地域の人みんな柔軟に豊かに働いていけているっていうようなことをつくりたいと思っていますので、ぜひ今後もお付き合いいただけたらと思います。

これで話終わりさせていただきます。ありがとうございます。

※ スライドは、一部のみ抜粋し、掲載しています。



III. 參考資料



家から **こども** が
でられない
家族 でかかえこまないで
ほっこり しませんか

ほっこり会
(ひきこもり家族の会)





認定 NPO 法人ハートツリーは
生きづらさを抱える人たちの未来への一歩を応援しています。

生きづらさや課題を抱える人の相談や、安心して過ごせる「居場所」づくりから、
就労支援まで、社会へと飛び立っていくための緩やかな歩みを私たちは全力でサポートします。

ひきこもりサポート事業

「外へ一歩踏み出したい」「誰かと話をしたい」
そんなときに気軽に立ち寄れる『居場所』がここにあります。
相談・訪問支援・社会体験活動・レクリエーションなどを行っています。



ひきこもりサポート事業

ひなたの森

認定
NPO法人 ハートツリー

Heart-tree is a Wakayama-based non-profit organization established in 2006



ひきこもりサポート事業

あづまプラッツ

認定
NPO法人 ハートツリー

Heart-tree is a Wakayama-based non-profit organization established in 2006



【ご利用日時】月～金曜 /9:00～18:00

(居場所は13:00～17:00まで)(土・日・祝日・夏期・年末年始はお休み)

〒646-0028 和歌山県田辺市高雄一丁目3番27号

【TEL・FAX】0739-33-7850 【E-mail】info@heart-tree.org



【ご利用日時】月～金曜 /9:00～18:00

(居場所は13:00～17:00まで)(土・日・祝日・夏期・年末年始はお休み)

〒647-0015 和歌山県新宮市千穂2丁目5-20

【TEL・FAX】0735-22-5570 【E-mail】platz@heart-tree.org

学習支援事業

ひとり親家庭の子どもや不登校生の学力向上と、様々な課題に寄り添います。



田辺市子どもの学習支援事業

「ひなた塾」

■小学生(4年生～)、
中学生、高校生(定時制・通信制)

【時間】学年によって時間が異なります

【受講料】無料



子ども食堂

「ひなた食堂」

■月1回 第4火曜日

■ひなた塾受講生

【時間】18:00～

【料金】1回100円



認定
NPO法人 ハートツリー

Heart-tree is a Wakayama-based non-profit organization established in 2006



認定特定非営利活動法人ハートツリー

【住所】和歌山県田辺市高雄一丁目3番27号

【TEL・FAX】0739-33-7850 【E-mail】info@heart-tree.org

【HP】https://heart-tree.org



就労準備支援事業

和歌山県・田辺市就労準備支援事業

認定 NPO 法人ハートツリー

heart work

ハートワーク

利用
無料

ハートワーク（就労準備支援事業）で

「働く」ための「準備」を 始めてみませんか？

認定 NPO 法人ハートツリーでは、

働きたいけど何から始めたらいいのかわからない方や様々な不安を抱えている方のために

「働く」ための準備の場を提供しています。

ご自身の課題や困りごとなど 1 つ 1 つクリアしながら私たちと一緒に取り組んでいきませんか？

まずはご相談ください。

「長期間働いていない」「コミュニケーションに自信がない」
「働く自信がない」「働くのが怖い」
など、働くことに悩みを抱える方
「働きたいけれど生活のリズムが崩れている」
「働きたいけれど体調に不安がある」
など、日常的な不安や悩みを抱えている方



「働く」ことの自信へと繋げる訓練の「場」

ハートツリー菓子工房

〒646-0028 田辺市高雄一丁目 23 番 1 号

田辺市民総合センター北館

【定休日】土曜・日曜・祝日【TEL・FAX】0739-33-7850



認定
NPO法人 ハートツリー

Heart tree is a Wakayama-based non-profit organization established in 2006



認定特定非営利活動法人ハートツリー

【住所】和歌山県田辺市高雄一丁目 3 番 27 号

【TEL・FAX】0739-33-7850 【E-mail】info@heart-tree.org

【HP】https://heart-tree.org





南紀若者サポートステーション

(厚生労働省受託事業)



「就労」に向けたそれぞれのステップアップを応援します。



写真はイメージです

15 歳から 49 歳までの若者への就労支援

「働きたいけど働く自信がない若者への支援」

「働いていない期間が長いので就職できるか心配」

「どんな仕事が自分に合っているのかわからない」

「対人関係が苦手で就職活動がづらい」など

職業的な自立のためのご相談を受け付けています。

相談の他にも、就職に役立つセミナーなどを開催しております。



【ご利用日時】 月～金曜 /10:00 ～ 18:00 (土・日・祝日・夏期・年末年始はお休み)

〒646-0028 田辺市高雄一丁目 23 番 1 号 田辺市民総合センター北館

【TEL】 0739-25-2111 【FAX】 0739-25-0085

【E-mail】 nanki-saposute@ec2.technowave.ne.jp

【HP】 <http://www.nanki-saposute.jp>



串本サテライト

【ご利用日時】 水・木・金 /13:00 ～ 16:00 (土・日・祝日・夏期・年末年始はお休み)

〒649-4125 東牟婁郡串本町姫 27 (旧) 養春小学校 2 階 5・6 年生教室

【TEL】 0735-67-7172 【FAX】 0735-67-7173



新宮サテライト

【ご利用日時】 水・金曜 /11:00 ～ 16:00 (土・日・祝日・夏期・年末年始はお休み)

〒647-0015 和歌山県新宮市千穂 2 丁目 5-20

【TEL・FAX】 0735-22-5570 【E-mail】 platz@heart-tree.org



認定
NPO法人 ハートツリー

Heart-tree is a Wakayama-based non-profit organization established in 2006.



認定特定非営利活動法人ハートツリー

【住所】和歌山県田辺市高雄一丁目 3 番 27 号

【TEL・FAX】0739-33-7850 【E-mail】info@heart-tree.org

【HP】<https://heart-tree.org>



若者サポートステーション WithYou 南紀

サポステ
地域若者サポートステーション
和歌山県委託事業

サポステ
地域若者サポートステーション
和歌山県委託事業

サポステ
地域若者サポートステーション
**若者サポートステーション
WithYou 南紀**

ご利用日時: 月～金曜/10:00～18:00
(土・日・祝日・夏期・年末年始はお休み)

〒646-0028 和歌山県田辺市高雄一丁目23番1号
田辺市民総合センター北館

TEL.0739-25-2111
FAX.0739-25-0085

[Eメール] nanki-saposute@ec2.technowave.ne.jp
[ホームページ] <http://www.nanki-saposute.jp/>
[携帯サイト] <http://www.nanki-saposute.jp/ktai/>

携帯サイトへアクセス!



南紀をぐるっとサポート!

利用料無料

**若者サポート
ステーション
WithYou 南紀**

悩みや不安を抱えている
15歳～39歳までの若者をサポートします。



予約制

相談は予約制になりますので、
お問い合わせください

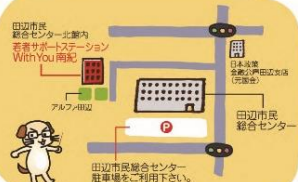
サポステ 新宮サテライト

ご利用日時: 第2・第4水曜日 11:00～16:00

〒647-0015 和歌山県新宮市千種2丁目5-20

TEL.0735-22-5570 FAX.0735-31-7730

[Eメール] shingu@nanki-saposute.jp



串本 新宮

予約制

相談は予約制になりますので、
お問い合わせください

サポステ 串本サテライト

ご利用日時: 火曜日・木曜日 13:00～16:00

〒649-4125 東牟婁郡串本町姫27(旧)養春小学校 2階 5・6年生教室

TEL.0735-67-7172 FAX.0735-67-7173



認定
NPO法人 ハートツリー

Heart-tree is a Wakayama-based non-profit organization established in 2006

認定特定非営利活動法人ハートツリー

【住所】和歌山県田辺市高雄一丁目3番27号

【TEL・FAX】0739-33-7850 【E-mail】info@heart-tree.org

【HP】<https://heart-tree.org>



若者サポートステーション WithYou 南紀

サポステ
地域若者サポートステーション
和歌山県委託事業

若者サポートステーション With You は



そんなあなたの **はじめての一步** を応援します！

若者サポートステーションWithYou南紀とは？



県内3カ所の「若者サポートステーション」(働くことに不安のある若者の就労的自立を支援する施設)に和歌山県若者総合相談WithYouを併設し、「若者サポートステーション With You」として、一体的に支援を展開しています。おおむね15歳から39歳までの若者が抱える様々な悩みや問題について支援機関と連携しながら対応しています。

サポートの流れ



★その他の相談として…公認心理士(臨床心理士)によるこころの相談(完全予約制)

好評！
**出張
サテライト相談**
串本・新宮サテライトで
出張相談を行っています。
詳しくはお問い合わせ
下さい。



安心のネットワークで応援します！

若者サポートステーション WithYou 南紀は、各関係支援機関と緊密なネットワークを構築していますので、安心して継続的・発展的なサポートを受けることができます。

さあ！まずは相談してみませんか！
ご家族からのご相談も、もちろんお受け致します。



認定
NPO法人 ハートツリー

Heart tree is a Wakayama-based non-profit organization established in 2006

認定特定非営利活動法人ハートツリー

【住所】和歌山県田辺市高雄一丁目3番27号

【TEL・FAX】0739-33-7850 【E-mail】info@heart-tree.org

【HP】https://heart-tree.org



NPO法人かたつむりの会

設立趣旨

「まちづくり」や「環境保護」の問題を障害を持った人や社会に出ることに支援が必要な人たちの就労、生活、発達支援につなげて取り組んでいきたいと考え、この法人の設立に至りました。

問題を個々に捉えるのではなく関連した問題、課題として捉え、活動していくことで、関わった全ての人や地域社会が安全で豊かなものになっていくことを願います。

まったく微力ではありますが、出来る所から少しずつ取り組んでいければと思っています。

沿革

2007年度
任意団体がたつむりの会として、社会生活を送る上で支援を求める人たちと共に活動を開始。
2008年2月29日
NPO法人かたつむりの会、設立
2009年2月
「町家カフェ上屋敷二丁目」をオープン。
2009年8月
障害者就労継続支援A型事業所として、県の指定を受ける。
2011年4月
町家カフェ多機能型として、障害者就労移行支援事業所「ワークサポート・いこう」を銀座通りに開所。一般就労に向けて、二年間の支援プログラムを実施する。
2012年9月
町家カフェ2号店として、元中部公民館を改修し「ララ・ロカレ」オープン。
2013年4月
「ワークサポート・いこう」を障害者就労継続支援B型事業所に変更。
2014年8月
指定特定相談支援事業所「町家カフェ上屋敷二丁目」を開所。
2016年11月
法人本部・指定特定相談支援事業所・就労継続支援B型事業所「ワークサポート・いこう」を移転。
2019年4月
「町家カフェ上屋敷二丁目」を障害者就労継続支援B型事業所に変更。

町家カフェ上屋敷二丁目 (障害者就労継続支援B型事業所)



古民家を改修したカフェです。
ランチや手作り石窯で
焼くピザが好評です。



田辺市上屋敷2-6-31
営業時間 9:00~14:00
(日曜・月曜定休日)
TEL 0739-20-5595



RaRaLocale (障害者就労継続支援A型事業所)

パスタとパンのお店です。
レトロな建物なので
ライブなどのイベントも開かれます。
週20時間以上働ける人は
雇用保険など社会保険に加入します。

「ララロカレ」
イタリア語で「地元の」
という意味です。



田辺市上屋敷2-6-7
営業時間 9:00~17:00
(火曜・金曜定休日)
TEL 0739-34-2146

ワークサポート・いこう (障害者就労継続支援B型事業所)



より広い層の利用者さんに通っていただけるよう
施設等を整備し、平成28年11月に移転しました。
働くことの土台作りを目指すとともに
少しずつ工賃も得ていきます。



田辺市上屋敷1-7-28
開所時間 月~金 9:30~16:00
(取組により曜日や時間帯変更あり)
TEL 0739-25-3888

特定非営利法人 共生舎

私共 NPO 法人共生舎は社会福祉法の制度に依らずそれぞれの立場の者がその個性を認め生かし、お互いに助け合って生活していくという理念の下に活動しております。

主な活動

・助け合い

・地区住民間の交流
・都市部の人々との交流
・地域の高齢者の生活援助



・(季節毎の行事、イベント etc)
・(大学ゼミ、子ども会活動、田舎暮らし体験、小旅行 etc.)
・(畑起こし、庭の手入れ、草取り
家の清掃 etc.)

・個性を生かす

・それぞれの人の個性を生かし助け合って生活する場の提供



・競争・経済至上主義によらない生活活動作りをめざす
(オアシス創り)

・自給自足をめざす

・休耕田の活用



・米、野菜作り活動

活動の場

・山あい拠点

田辺市(旧大塔村)五味 240-10 共生舎 古民家 定員 10 名

ただいま活動に共鳴していただける方を求めています

1. 正会員になる。(年会費 5,000 円)
2. 共生舎のPRをしていただける方
3. 上記行事などへのボランティアに参加していただける方
4. 財政的援助をしてくださる方(金額は問わず)

連絡先 NPO 法人共生舎 田辺市五味 240-10
(Tel) 0739-62-0400

田辺市「ひきこもり」検討委員会設置要綱

(設置)

第1条 思春期・青年期にある者(以下「青少年」という。)にみられる「ひきこもり」の問題について、関係機関が相互に連携して一体となって取り組むことを目的として、田辺市「ひきこもり」検討委員会(以下「委員会」という。)を設置する。

(検討事項)

第2条 委員会は、前条に規定する目的を達成するため、次に掲げる事項について検討等を行う。

- (1) 「ひきこもり」の状態にある青少年についての支援活動に関すること。
- (2) 前号に規定する青少年に関する問題点等について検討すること。
- (3) 「ひきこもり」の予防活動に関すること。
- (4) 「ひきこもり」に関する研修や研究会に関すること。
- (5) 前各号に掲げるもののほか、委員会の目的達成のために必要な事項に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、委員42名以内で組織する。

- 2 委員は、学識経験者、民間支援団体、医療・保健・福祉・教育関係機関、市職員等のうち、市長が委嘱し、又は任命する。
- 3 委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の在任期間とする

(委員会)

第4条 委員会に委員長及び副委員長2名を置き、委員の互選によりこれを定める。

- 2 委員長は、会務を総理する。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

(会議)

第5条 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

- 2 委員会は、委員会の委員の代表による小委員会を設置し、定期的に会議を開き、その結果は委員会へ報告する。
- 3 委員会は、必要があると認めるときは、委員以外の者の意見又は説明を聴くため、その者に委員会への出席又は文書の提出を求めることができる。

(事務局)

第6条 委員会の事務局は、保健福祉部健康増進課に置く。

(その他)

第7条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成17年5月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成18年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成20年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この要綱は、平成 25 年4月1日から施行する。

		選 出 区 分	備 考 (選 出 団 体 ・ 役 職 名)
委 員 長	1	福祉関係団体・機関	社会福祉法人やおき福祉会
副 委 員 長	2	学識経験者	臨床心理士／公認心理師
副 委 員 長	3	民間支援団体	認定NPO法人ハートツリー ひなたの森
小 委 員	4	学識経験者	
小 委 員	5	民間支援団体	認定NPO法人ハートツリー 若者サポートステーション With You南紀
小 委 員	6	福祉関係団体・機関	社会福祉法人ふたば福祉会
小 委 員	7	福祉関係団体・機関	西牟婁圏域障害児・者相談センター にじのわ
小 委 員	8	保健機関	田辺保健所(精神保健福祉相談員)
小 委 員	9	田辺市役所	教育委員会学校教育課
小 委 員	10	田辺市役所	教育委員会生涯学習課
小 委 員	11	田辺市役所	やすらぎ対策課(障害福祉室)
小 委 員	12	田辺市役所	福祉課
小 委 員	13	田辺市役所	健康増進課
	14	民間支援団体	共生舎
	15	青年会議所	白浜・田辺青年会議所
	16	民間支援団体	NPO法人 かたつむりの会
	17	福祉関係団体・機関	紀南児童相談所
	18	医療関係者・団体・機関	精神科医師
	19	医療関係者・団体・機関	精神科医師
	20	医療関係者・団体・機関	紀南こころの医療センター(臨床心理士/公認心理師)
	21	教育関係機関	田辺市教育研究所
	22	教育関係機関	田辺市養護教諭研究会
	23	教育関係機関	和歌山県教育庁 紀南教育事務所
	24	教育関係機関	紀南六高校代表
	25	教育関係機関	西牟婁養護教諭研究協議会高校ブロック代表
	26	教育関係機関	南紀高等学校
	27	学識経験者	文京学院大学(准教授/臨床心理学博士/公認心理師)
	28	学識経験者	主任児童委員
	29	学識経験者(民生委員・児童委員等)	龍神地区
	30	学識経験者(民生委員・児童委員等)	大塔地区
	31	学識経験者(民生委員・児童委員等)	中辺路地区
	32	学識経験者(民生委員・児童委員等)	本宮地区
	33	田辺市役所	保健福祉部長
	34	田辺市役所	子育て推進課
	35	田辺市役所	商工振興課